

熊谷地区労働組合協議会
(熊谷地域労働者福祉協議会)
地域社会研究会

地域社会研究論集 3

共同体の起源に関する研究と歴史人類学の家族研究をめぐる考察

ユーリー・セミョーノフ『人間社会の起源』と
ミヒャエル・ミッテラウアー『歴史人類学の家族研究』の読解

山下祐樹

2016

熊谷地区労働組合協議会
(熊谷地域労働者福祉協議会)
地域社会研究会

共同体の起源に関する研究と歴史人類学の家族研究をめぐる考察

ユーリー・セミョーノフ『人間社会の起源』と
ミヒャエル・ミッテラウアー『歴史人類学の家族研究』の読解

Consideration concerning a study about an origin of a collective and the family study of
history anthropology.

Reading and comprehension of a study introduction from Semenov, IUrii Ivanovich "Origin of
Human Society" and Mitterauer, Michael "The Family Study of History Anthropology"

2016

山下祐樹
YAMASHITA YUKI

熊谷地区労働組合協議会
(熊谷地域労働者福祉協議会)
地域社会研究会

共同体の起源に関する研究と歴史人類学の家族研究をめぐる考察

ユーリー・セミョーノフ『人間社会の起源』と
ミヒャエル・ミッテラウアー『歴史人類学の家族研究』の読解

目 次

第1章 共同体の起源への着眼—ユーリー・セミョーノフの研究と古人類学

序 論 共同体の起源に関する研究をめぐる …… 2

第1節 人類史における共同体の始原 …… 4

第2節 人類社会発生原像 …… 14

第2章 歴史人類学による「家族」共同体の様相

第1節 ミヒャエル・ミッテラウアー『歴史人類学の家族研究』をめぐる …… 27

脚注・出典 …… 35

第1章 共同体の起源への着眼—ユーリー・セミョーノフの研究と古人類学

序論 共同体の起源に関する研究をめぐる

共同体の起源についての考察は考古学、人類学の領域の成果に委ねることが適切である。マルクス・エンゲルスの共同体に関する議論の根底は、『古代社会』を著したモルガン（Lewis Henry Morgan）などの人類学者の論証が存在している。しかしながら、当時のモルガンを始めとした古代社会に関する議論の大半が、同時代の辺境地域における先住民族や文明に晒されていない民族の文化を研究といった未開社会への着目が中心となっているため、明確な意味での古代社会を分析しているとはいえない。同時代でありながら、近代世界の中心地から距離を置いた辺境の地や未開の地に、古代文化や共同体の様態が存在しているという視点は、モルガンの時代における考古学や人類学が揺籃の時期であったにしても、それらの研究内容や資料をそのまま参照することはできない。しかしながら、そのような状況は解消されつつある。つまり、民族学と考古学、更には古人類学の進展によって、モルガンらが主題とした古代社会より古き前史時代の人類や新人類、原人にまで至る生存の様子が、分析に向けた憶測を含みながらも、明らかになりつつある。いわゆる、新たなる古代資料、前史資料が整理され議論されることは、人類史研究へと大きく寄与することであろう。これら最たる最初の成果の一つとして挙げられる著作は、ロシアの人類学者、ユーリー・イワノヴィチ・セミョーノフ（Ю・И・セミョーノフ）の『人間社会の起源』（露語、1989年、邦訳・新堀、金光、築地書館、1991年）である。先ず、訳者後書きを参照に著者の研究と本書の意義について紹介する。

ユーリー・セミョーノフの前著「人類はどのように出現したか」（1966年）は、邦訳『人類社会の形成』（中島・中村・井上訳、法政大学出版局、1977年）として公けにされ、哲学、自然科学（とくに第四紀学、および人類学などの生物科学）、社会学（とくに考古学、民族学、古経済学など）に、人類の起源とそれに関連する諸問題の研究のための方法論、認識論に影響を与えている。この書は、当該分野に新たな視点を与える重要な著作であると評価された。本書『人間社会の起源』は、原題が「人類史の曙」（1989年）である。この論証に向けてのセミョーノフの動機は、前著の出版後、急速に進んだ動物行動学、社会生物学、遺伝学、霊長類学、および経済人類学などの分野の最新の研究成果に見合った人類社会の形成史（人類社会発生）を、新しく書き下ろしたものである。前著にない主要なポイントは、「社会とは何か」という人類特有の最大の問題のさらに中心的な課題、生産を行う人々の関係＝生産関係がどのように発生したか、ということである。したがって本書は、人類の前史、動物である前人とその結合体が、一方では動物的な条件反射活動から言語＝思考の意識活動へ、つまり大脳の物質的な進化、他方では順位制、群居性組織から平等分配式共同体へという経過について、歴史的、理論的に語られ、多くのページをさいている⁽¹⁾。

また、前著よりも前人から形成しつつある人類の原人・旧人とその社会、さらに、完了した人類の新人とその社会（氏族社会）へ、という転化が遺物・遺跡の最新の年代データを含む研究で裏づけられているということを読者は認識することができる。加えて、セミョーノフは本書の冒頭で以下のように示している。

人類史の曙は、人類社会が生じた時代である。社会発生の問題は、最も複雑な問題の一つである。それを解くことは、物質の運動の生物学的形態から、質的に全く新しい社会的形態への移行がどのようであったか、を示すことになる。このためには、生物学、ならびに社会科学の諸資料を使いこなさなければならない。本書では、それ以外に動物行動学、霊長類学、遺伝学、進化論、古人類学、さらに考古学、民族学、民俗学の資料にもとついて、この課題を解決するように試みた⁽²⁾。

旧著を執筆した1950年代から1960年代初め—その後20数年間に事態は大きく変った。第一に、科学史上初めて、類人猿を含むサル其自然条件での行動の研究が、多数現れたことである。第二に、外国では経済人類学、ソ連では経済民族学、と呼ばれる科学が発達したことである。この経済人類学によって収集された膨大な資料から、原始生産関係の最初の形態を復元し、その進化の客観的な道すじを明らかにすることが可能になった。

以上全てのことが、物質の運動の生物学的形態から社会的形態への掛け橋をつくり、生産諸関係の発生と形成の内的なメカニズムを明らかにすることを可能にした。生産諸関係の発生—それは本書の主要なポイントである。しかし、本書の内容がそれだけでないことは、おのずと理解されるであろう。社会の成立は、社会＝経済的諸関係だけではなく、社会的諸関係全般の成立でもある。また、本書では、我々の遠い祖先である形成しつつある人類の生業と生活様式、および可能などころでは、その精神生活をも考察した。もちろん、本書では、第二の転換点にも触れているが、その割合は少ない。二十数年前に私が提起したこの問題についての有益な命題は疑問をもたれなかったばかりか、逆に、本書でも引用した新しい資料でも裏づけられた⁽³⁾。

以上のように、人類学と考古学を中心に据えながらも、その他の学問分野の進展や、新たな学問体系の増設によって、セミョーフの設定した各テーマへの追究は新段階へ至ったと考えられる。特に、彼が重視するものは米ソ冷戦中におけるソ連側の進歩した各種学問の成果である。それは社会主義の内部からの唯物論の考証に用いるべき、論拠の発掘を国家レベルで行っていたという証でもある。けれども、セミョーフはソ連内部の学問的成果に固執するのではなく、全世界から報告される研究や、遺跡発掘により得た新たな情報等を踏まえた上で、『人間社会の起源』が論述しているのである。

ただし、『人間社会の起源』という題目からも分かるとおり、共同体と社会という明確な用語に関する区分は重視されていない。もちろん、これらの論考は共同体とは何か、社会とは何かという、哲学的な議論を主たる目的としていない。しかしながら、本書の意義は、概念の区分を基本に据えるのではなく、多くの資料に基づいた、人類学的な性格を持つ本書であるからこそ、旧人と旧人の「集まり」という形態や、新人類と新人類の「集合体」という意味での「共同体」の様子を分かりやすく提示してくれるのである。つまり、古代、前史時代における「共同体」の起源を探る上で、『人間社会の起源』は参照すべき多くの主題を含んでいるといえよう。本章は、この著作を依拠として各所の引用を行いながら、人類史の先駆けとなった時期における共同体、社会の状態について論述していくことになる。

上記については第1章における第1節と第2節が該当する。第2章は、セミョーフによる原始人の共同体の考察からは距離を置きながらも、婚姻による他の共同体との関連性についての論究を一つのテーマとする前節との関係を維持しつつ、ヨーロッパの家族形態について論究する。主として、ミヒャエ

ル・ミッテラウアー『歴史人類学の家族研究—ヨーロッパ比較家族史の課題と方法』（原題：Historisch-anthropologische Familienforschung. Fragestellungen und Zugangsweisen, Wien/ Köln 1990 若尾・服部他訳 新曜社）を参照にしつつ、有史以降の家族像について検討する。著者のミッテラウアーはウィーン大学で学び、後にウィーン大学正教授として「経済社会史研究所」の運営を任され、「ウィーン史学」の一員として、学位論文の『南東部におけるカロリング辺境伯』を始め、歴史人口学や比較都市史、中世史研究に関する著作を数多く発表している。『歴史人類学の家族研究』において、ミッテラウアーの示す家族構造の比較についての論述（「ヨーロッパの家族形態—異文化間の比較」）はヨーロッパ家族史に関する多くの論点を持ち合わせている。したがって、第2章では、ミッテラウアーの研究に含まれる歴史人類学による家族共同体の理解という点に着眼点を置き、論考することになる。

第1節 人類史における共同体の始原

人類社会成立の最初の段階

先ず、論点の前提として示される氷期区分について改めて説明を加える必要があるだろう。今日における研究解釈との差異を含む部分もあるが、古い時代からの区分を概ねの年順に示すと以下のようなになる。400 万年前から 300 万年前におけるベーベル氷期とビーベル・ドナウ間氷期。300 万年前から 180 万年前におけるドナウ氷期。180 万年前から 100 万年前までのドナウ・ギュンツ間氷期。100 万年前から 70 万年前までのギュンツ氷期。70 万年前から 50 万年前までのギュンツ・ミンデル間氷期。50 万年前から 35 万年前までのミンデル氷期。35 万年前から 20 万年前までのミンデル・リス間氷期。20 万年前から 10 万年前までのリス氷期。10 万年前から 7 万年前までのリス・ヴルム間氷期。7 万年前から 1 万年前までをヴルム氷期と称し、更に、7 万年前から 4.5 万年前までのⅠ垂氷期というように細分化される。続けて、4.5 万年前から 3.5 万年前までのⅠ・Ⅱ垂間氷期。3.5 万年前から 3 万年前までのⅡ垂氷期。3 万年前から 2 万年前までのⅡ・Ⅲ垂間氷期。2 万年前から 1.5 万年前までのⅢ垂氷期。1.5 万年から 1 万年前までのⅣ垂氷期。そして、1 万年前から現在までを後氷期と称す⁽¹⁾。この氷期の区分に人類への経過と種別を投影させると、ビーベル氷期からドナウ・ギュンツ間氷期の中間までの時期に生息していたのが、アウストラロピテクスやホモ・ハビリスといった種別が該当するプロアントロプス（前人）である。次は、ドナウ・ギュンツ間氷期の中間からミンデル・リス間氷期の中間までという長期にわたる種別の継続がなされたのが、アルカントロプス（プロトアントロプス＝原人）である⁽²⁾。続いて、ミンデル・リス間氷期の中間ないしリス氷期から、ヴルム氷期のⅠ・Ⅱ垂間氷期の中間までのパレオアントロプス（旧人）に繋がる。そして、Ⅰ・Ⅱ垂間氷期の中間ないしⅡ垂氷期から後氷期、現代に至りホモ・サピエンスとも称されているのがネオアントロプス（新人）である。また、文化状況の区分によると、ドナウ・ギュンツ間氷期の前半の時期をエオリスと呼ぶ。続いて、ドナウ・ギュンツ間氷期の後半一部までのエオ・アルケオリス。ドナウ・ギュンツ間氷期の末期からミンデル・リス間氷期の中間までのパレオ（前期）アルケオリス。ミンデル・リス間氷期の後半からⅠ・Ⅱ垂間氷期までのネオ（後期）アルケオリス。そして、Ⅱ垂氷期から歴史発生までをカイノリスと称す⁽³⁾。

これらの段階の中で人類社会成立の最初の段階ともいえるのが原人の時代である。原人の時代は 150 万年という膨大な歳月におよんでいる。その進化の過程は、三つの段階、すなわち前期原人（エオアルカントロプス）、後期原人、最末期原人の段階に区分することから、セミョーノフの人類社会への着目は始まる⁽⁴⁾。

これらの各段階は、前期アルケオリスの進化における特定の段階と対応している、と思われる。原人の進化、したがって彼らの原始人群共同体の進化における三つの段階を、資料の不足から別々に考察することは事実上できない。これら形成しつつある人類を個々の段階に区分せずに、概括的にその生活の状況を描くことはできる。この場合、資料の大部分は後期と最末期原人に関するものである。とりわけ、原人が、段階的に広がっていった状況を描くことは不可能である。ハビリスが暑い気候、あるいは温暖な気候の地域（東アフリカと多分、南アフリカ、それにジャワの可能性もある）に生活していたのに対して、原人の生活圏はより広い地域であった。原人は、南アフリカと東アフリカ、マグレブ、中東（シリア、レバノン、パレスチナ）、南アジア（インド、パキスタン）、南東アジア（ベトナム）、ジャワ、中国北部、ヨーロッパ西部と中央部に住んでいた。彼らの生息地は、論理的に考えると中国南部にもおよんでいた、と考えられる。このほか、原人が、ミャンマ、ラオス、カンボジア、アフガニスタン、イラン、イラク、トルコ、中央アジア南部、カザフスタン南部、ザカフカス、東ヨーロッパ南部にも住んでいた可能性がある。原人がこのように広域に分布し、しかも極めて異なる自然条件の地域を征服した、という事実それ自体は、まぎれもなく、彼らがもはや動物ではなかったことを証明している⁽⁵⁾。

原人に、多少とも大きな集団原始人群共同体が存在したことは疑いない。全体として彼らは、ある場所から他の場所へ移動する移動生活様式を送っていた。だが、アフリカの資料が証明するところによれば、キャンプはハビリスのものより多くの人数が生活していた。

例として、ケニアのオロルゲサイリエのキャンプがあげられる。その石器インダストリー（製作）は、以前には後期アシュール文化とみなされていた⁽⁶⁾。だが、サハラ以南のアフリカの後期アシュール文化は、ヨーロッパの後期アシュール文化とは大きく違っている。とくにオロルゲサイリエの石器群の年代は四五万年前で、原人に属するものとみなされている。この遺跡を詳しく研究した G・アイザックが、ここの石器インダストリーを中期アシュール文化とみなし、その後、これを単にアシュール期のものとみなしたのは偶然ではない⁽⁷⁾。セミョーノフは以上の状況を更に詳しく示している。

オロルゲサイリエの一部のキャンプには、石器と礫塊石器が 1 トン以上もあった。このように大量の石器材料の集積は、長期 2-3 カ月以上）にここに連続的に滞在したか、くり返し、そこに何度も立寄った可能性を示している。追加的な多くの局面から、この遺跡の研究者は、どうしても前者の結論に傾くようになっている。これが季節的定住、すなわち数カ月間、人々は一ヶ所に住み、残りの期間は移動生活様式を送っていたことを示している。この種の状況は、現在の狩猟採集民で記録されている。だが、原人に季節的定住があった、としても、それは普遍的現象ではなかった。原人の大部分は、たえず移動を続け、数日、あるいは数週間以上、どこにもとどまらなかった、と理解するほうが確実であろう。多くの場合、同じ場所に定期的に立ちもどったことは疑いない。しかも、彼らは、古いキャンプに直接に住む場合もあれば、その隣り合う場所に住むこともあった。現在のオーストラリア原住民の資料から判断すれば、後者の生活がより頻繁におきたに違いない。一度だけの短期キャンプでも、多数のものが隣りあって集合した結果、石器や動物の骨の配置が広い地域に分散する場合も

ある。オロルゲサイリエでも、数多くこのような遺跡が発見されている。多少とも長期にわたるキャンプ以外に、それとは別のタイプのキャンプもみられた。それは、まず、大型の動物の遺体を解体する場所である。これはアフリカでも、ヨーロッパでも発見されている。遺跡の特別の種類は「作業場」である。ここには、原料源の近くに生産の廃物が集積していた。アフリカでは、原人のキャンプは水辺にあった。すなわち、川岸、湖岸である。世界の他の地域については、これほどはっきりした資料は存在していないが、そこでも同様であろう。⁽⁸⁾

少なくとも一部のキャンプでは、原人はなんらかの形の設営をした。オロルゲサイリエの一連のキャンプにとっては、なんらかの人工の囲いが存在していた、という結論がでるほど、はっきりした囲いが特徴的であった。だが、この囲いが自然の作用でできた可能性も否定できない。前期アシュール文化に属するフンスギ遺跡（インド亜大陸）では、明らかに意図的に置かれた、と思われる 30-80 センチ大の花コウ岩塊の集積が発見されている。これは、二つの自然にできた 50-100 センチの石の集積を結ぶ線をなしていた。その結果、東、北、西を石で囲まれた 60 平方メートルの楕円形をした広場がつくられて、それは人々の住居であった。⁽⁹⁾

加えて、セミョーノフは様々な遺跡の発掘結果について着目して、上記のオロルゲサイリエの遺跡との比較と共に、当時の状況を生々しく説明している。

フランスのニースのテッラ・アマータ遺跡は、ミンデル氷期末期に属し、その年代は 38-45 万年とされている。石器インダストリーは、前期アシュール期とみられている。ここで人々は、普通・春には数日しか住まなかった。にもかかわらず、この遺跡を詳しく調べた A・リュムレイによれば、人々はこのときに住居を設けた。各住居の基礎は、木の棒で、その痕跡が発掘の際に発見されている。小屋は長さ 7-15 メートル、幅 4-6 メートルの楕円形で、床の一部分は細礫で敷き詰められていた。各小屋の中央には、直径 30-50 センチの穴、あるいは礫を敷きつめた場所の形をした炉があった。炉は北東の卓越風から石の壁で防護されていた。キャンプと解体場が残っていることは、原人の生活では、狩猟が重要な役割を果たしていたことを物語っている。狩猟はハビリスより効果的性格を帯びていた。とりわけオルドヴァイ峡谷の資料がこれを証明している。トラルバとアンブロナ（スペイン）の遺跡で、大型動物、とりわけゾウの骨が大量に発見されているのは、原人の一部の集団における狩猟の効率が極めて高かったことを物語っている。これらの遺跡の石器インダストリーに関する研究者は、前期アシュール文化の時期と普通みなしているが、その年代はミンデル氷期、正しくはミンデル氷期後期とみなされる。ゾウのなかでは 70%が成獣、とくに雄であった。したがって、古代の狩人たちは、巨大で危険な動物をうまく狩猟することができた。現存する資料は、ゾウが沼に追い落とされ、捕獲された、とみなす十分な根拠を与えている。このような狩猟が集団的であったことは確かである。トラルバとアンブロナの狩猟は季節的な性格を帯び、狩人たちは一年の暖かい季節にのみやってきた。⁽¹⁰⁾

続いて、セミョーノフは、後期前人に比較して原人の主要な武器については、もう少し研究が進んでいる、としてその研究結果の一部を説明している。

ハビリスが木の道具を使用していたことは推定の域を出ないが、原人には直接の資料が存在している。1962-3 年、アンブロナでとがった先端部分が残っている、長さ 50 センチの木槍の一部が発見さ

れた。同じくここで、意図的に加工している様々な木片が、かなり多数発見されている。イチイ（アラギ）づくりの槍の一部がクラクトン・オン・シー遺跡（イングランド）でも発見されている。しかし、この遺跡がミンデル・リス間氷期に属するので、この槍が原人の狩猟具であった、というはつきりした確信はない。それは次の人類である旧人の武器、という可能性もある。⁽¹¹⁾

狩猟のときに石も使用された。トラルバとアンプロナの遺跡では、つまかさなった石が発見された。特別に採取され、ともに集められた大量の石がアフリカのキャンプで見られる。それは攻撃だけでなく、おそらく肉食動物からの防衛にも役だったであろう。原人は狩猟とともに採集にも従事していたに違いない。暑い気候、暖かな気候の地域に住んでいた原人の採集は、量の点では、食物の半分以上をもたらした可能性が強い。このような自然条件に住んでいる現代の未開の狩猟＝採集民の圧倒的多数の層も、同じ状況である。彼らの食事で占める植物性食料の割合は 60-80%であった。⁽¹²⁾

対して、セミョーノフは、温和な気候、および寒冷な気候に生活していた原人は、冬季に採集に従事できなかったことを指摘する⁽¹³⁾。加えて、「彼らに漁労があったことを示す資料はないので、冬季には肉食をしていたのであろう。しかし、このためには狩猟で大量の獲物をもたらす必要がある。狩猟の技術が比較的高いだけで、温和で寒冷な気候地域を移動することは、形成しつつある人類にとって可能なことであった」⁽¹⁴⁾。また、「民族学の資料が示しているように、中緯度地方に住む未開の狩猟＝採集民の食物中の植物性食物は 50%を超えていない。一番多いのは 20-40%であった。残りは狩猟と漁労の獲物であった。植物性食料の採集・加工にも道具が必要であった。この時代のアフリカの遺跡では球形石器がしばしばみられ、それに残っている痕跡を、一部の著者は植物性食料を細かくするためにできた。」⁽¹⁵⁾という解釈をセミョーノフは提示することで、当時の原人の生活状況を明らかにしている。

原始人群共同体の規模

セミョーノフは「原始人群共同体の規模」という項目を設定して、さながら「共同体」の起源の問題に論を進めている。そして、「最も合理的なのは、原人の社会的組織を、その原始群共同体の数の問題から始めることであろう。研究者たちは原人の集団の人数を明らかにする際、次の点から出発していることが一番多い。第一は、ここで論じている時代のキャンプの大きさについての考古学的資料、第二に未開の狩猟・採集民の集団の人数と、そのベース・キャンプの面積との比率に関する民族学の資料から出発することである。」⁽¹⁶⁾という指摘を前置きして、セミョーノフは以下の通りに各種研究から共同体に関連する諸事象を抽出する作業に取り掛かっている。

最もよく研究されている遺跡群のあるオロルゲサイリエでは、ある遺跡は、28-38 平方メートル、別のものは 180-300 平方メートルある。これから、G・アイザックは、小さな規模の遺跡には 4 人の大人を含むグループが、大きいほうには、大人の数が 20-30 人のグループが住んでいた、とみなしている。そして彼は、小さなほうのグループは、より大きく安定した集団が一時的に分割された結果生じた、とみている。20-30 人の大人を含む集団の人数の総数は、少なくとも 40-60 人であったはずである。

⁽¹⁷⁾

トラルバとアンブロナの遺跡群を詳しく研究した L・フリーマンは、別の資料から出発した。この遺跡群の各遺跡は、獲物の解体作業場であった。近くで殺した数頭の動物は、しばしばいっしょに解体された。これらの解体作業場の特徴から出発し、フリーマンは、この作業には、同時に 10-35 人の大人が参加した、という結論に達している。彼は、後者の人数は追い込み猟の最低の参加者数に最も近い、とみている。これらの解体作業場には、動物の遺体の多くが欠けている。これは、狩猟が終了した後、食肉の大部分がキャンプに運びこまれたことを示している。これから、また、動物の遺体に、集団の全成員でなく、その一定の部分、多分、大人の男子と若者のみが参加した、という結論がでてくる。⁽¹⁸⁾

フリーマンの意見では、集団全員の人数は前述の 4-5 倍であったに違いない。このような狩猟の結果、摂食した肉量が多いこと、集団が大きかったことを推察させる。肉量は 1-2 トンあった。全体としてフリーマンは、トラルバとアンブロナで狩猟集団の人数が 100 人に達し、あるいはそれ以上だ、と結論している。このような集団は、より小さな集団が一時的に連合した結果、一定の季節にのみ生じた可能性もある、とみている。しかし、適した条件のために、この地方では、このような集団がいつでも存在していたと考える方が確実だ、と彼はみている。⁽¹⁹⁾

上記の通り、セミョーノフは G・アイザックと L・フリーマンの言説を勘案した上で、「形成しつつある人類、すなわち原人と旧人集団の人数の最大が 75-90 人、最適の人数が 50-60 人、最小の人数が 35-40 人という根拠のある仮定と、大方一致している。」⁽²⁰⁾ という共同体の具体的な側面を指摘している。しかしながら、「ここで問題にしているのは真の原始人群共同体、すなわち独立して発展する能力をもつ形成しつつある社会的組織のことである。もちろん、もっと小さな集団があった可能性もあるが、それらは原始人群共同体ではなく、共同体が一時的に分裂したものか、以前のものの遺存であった」⁽²¹⁾ という付言によって、原人の共同体が一様でないことを示唆している。

続いて、セミョーノフは、「原人の共同体における社会的諸関係」に着目する。そして、原人の共同体における社会的諸関係の復元だけは可能であることを明言し。生産諸関係は、まず共同体的所有関係、すなわち全消費物資と全生産手段に対する完全な絶対的な集団所有であった。共同体的所有は、しだいに形成された。共同体所有の最初の対象は大型動物の肉であった。肉に対する共同体的所有は、原始人群共同体の全成員の需要に応じて、全成員に肉を分配することに現れた、という経過を概略的に示している⁽²²⁾。

しかしながら、「大型動物の肉はながい期間、共同体的所有の唯一の対象ではありえなかった」⁽²³⁾ というように、セミョーノフは加えるのであった。

すなわち、集団の成員の一部を、不利な状態に陥れる原因になるからである。狩猟に参加したのは、主として大人の男たちと若者、それに子どものいない若い女たちであった。狩猟は困難な作業で、多くの時間と労力を必要とした。そのために、狩猟参加者は、植物性食料の採集にほとんどたずさわれなかった。このことは狩猟に参加した成員が、集団の残りの成員よりも肉を取得するのに、大きい可能性が保障されていた、ということであった。⁽²⁴⁾ けれども、セミョーノフが重視するのはあくまで大型動物の肉に対する共同体的所有であり、次のような考察を続けるのである。

大型動物の肉に対する共同体的所有の確立によって、事態は変化した。狩猟に参加せず、この期間、植物を採集し、それを食べていた大人の女たちも、これによって狩猟の参加者と平等に肉のほうも取得できるようになった。その結果、狩猟参加者とそれに不参加する集団といった二つの集団の間で、食物の分配の不平等が存在することになった。だが、食物を集団の全成員が平等に取得することができる場合にのみ、生産活動は発展することができた。したがって、植物性食料を含む食物の全てに、共同体的所有がおよぶことが避けられなかった。それは、狩猟に参加しない大人の女たちが特別に植物性食料を集め、それをキャンプに運んで、共同体の残りの成員にも自由にとらせるようにした点に現れている。こうして、人間の生業活動の特別な形態としての採集が生じた。そして、この時期から、形成しつつある人類の共同体内部に分業が現れた、ということが出来る。⁽²⁵⁾

全ての労働手段は、その効果によって直接、あるいは間接的に消費物資を作りだすことができる限り、価値をもっている。したがって、食物に対する共同体的所有の確立は、同時に食物を取得する全ての労働手段と、これらの労働手段を製作する道具に対する完全な集団所有への移行を、同時に意味していた。人類によって製作されたもの全てが共同体的所有の対象になった。⁽²⁶⁾

つまり、「その結果、道具の製作と生存手段の取得をするための人々の活動全体が根本的に変化した」ということである。そして、「製作され、取得されたあらゆるものが共同体の完全な所有になったため、道具の製作と食物の取得そのものは、共同体的所有の再生産過程、すなわち単に技術的だけでなく、社会的・経済的過程になったものである。こうして、共同体的所有は、分配過程だけでなく、道具の製作と食物の取得過程においても、一つの関係、すなわち真の生産諸関係になった」という論述が続く⁽²⁷⁾。ここにおいてセミョーフが重視した点は、社会的・経済的過程への変化ということである。

他方、セミョーフは、旧来から続く狩猟の意義の変化について指摘する。すなわち、「共同体的所有関係の出現にともない、狩猟は全く異なる性格を帯びた。狩猟に参加した人数が何人であっても、それで獲得された肉は、集団の全成員のものになった。したがって集団の全成員は、いつも直接に自分のためではなく集団のために、そして、その成員としての自分のためにもたえず狩猟をした。彼らは、狩猟の参加者としてではなく、集団の成員として肉の分け前をもらうようになった。共同体的所有の再生産過程となった狩猟は、社会的性格を帯びるようになった。狩猟は個人の活動ではなく、それに参加した人数に関係なく、集団全体の活動になった。一方、採集は、共同体的所有の出現にともなうのみ発生し、したがって最初から社会的性格を帯びていた。道具の製作、狭い意味での生産活動は、もちろん社会的性格を帯びていた」⁽²⁸⁾とセミョーフは指摘し、狩猟の共同体的所有の再生産過程としての意義を提示するのであった。

加えて、セミョーフは共同体的所有関係が出現した原因を論じている。その原因とは何たるか、以下のように示している。

共同体的所有関係が出現した生産活動の次のような特徴に根ざしている。すなわち、生産活動は、最初は肉、ついで全食物、したがって集団の成員がえた全生産物に対する完全な集団的所有の出現、そして動物的結合体から形成しつつある社会への転化も不可避のものにした。これが生じたとき、集団の成員によって作られ、獲得された全てのものは、社会的生産物になった。この生産物は、それが

社会の成員によって取得され、創造されたという意味でもまた、完全な社会的所有であった。⁽²⁹⁾

要するに、既に形成し終った社会発展の初期段階においてさえ、生産物は、集団の成員の正常な肉体的維持、その社会的存在を維持のために絶対的に必要なだけ、成員全体が生存を保障されるだけ、生産されたということである⁽³⁰⁾。このようなことは、原始人群社会では、先の段階の状況であるが、全社会的生産物が生活を保障する条件の下では、唯一の可能な分配の形態となったのは、集団の成員の要求に応ずる分配であった。平等な共同体的分配以外の任意の分配形態は、このような社会的生産物の量では、集団の成員の一部が絶えず飢餓に見舞われ、当然、餓死をもたらし、その結果、共同体の人数を最小限にきりつめてしまった状況として、垣間見られるということである⁽³¹⁾。つまり、「集団の成員によって作られ、取得された全てのものに対する集団の完全な所有が発生し、したがってこれらのもの全てが社会的生産物に転化したときから、社会的生産物の量は、ほかのどんな生産諸関係でもなく、まさに共同体的生産諸関係の存在、すなわち共同体的所有と共同体的分配との存在が、客観的に不可欠な要因になった」とセミョーノフは捉えている⁽³²⁾。

更に、原始人群社会でも、形成し終った原始社会の初期の段階でも、社会的生産物の最も重要な部分は狩猟の獲物であったという事情は看過できないであろう。ただし、狩猟の成果は、狩猟者の努力よりも周囲の状況に大きく左右される。人類の生存自体が偶然性に支配されていることは、社会的生産物全体が生活保障のための物資であった段階に、とくに明らかに現れたとされている⁽³³⁾。加えて、セミョーノフは「社会が正常に存在するための必要条件は、食物の取得における偶然性の支配を断絶することであった。—このような偶然性をなくす方法で、集団が取得した全食物が、集団で取得したのか、個人によるものか、に全く関係なく、これら全食物に対する集団の完全な全面的所有が確立した。共同体的所有と、共同体的分配だけが、集団の一部の成員が食物の取得に失敗しても、別の成員の成功によって埋めあわすこと、したがって集団の各成員に、最低の生活物資を系統的に保障することができるようになった⁽³⁴⁾」というように、偶然性に対峙するための成員の相互依存について論じている。

しかし、狩猟それ自体は、共同体的関係を生みださないことは明白であろう。狩猟は、ただ生産活動の発展に条件づけられた共同体的関係の発生を、或る程度促進させるにすぎない、ということである⁽³⁵⁾。ただし、この狩猟の特徴が、共同体的関係を客観的に不可避なものにする要因に関して、セミョーノフは次の数点を挙げている。つまり、彼は「第一に、これらの関係が既に存在し、したがって狩猟の取得が社会的生産物の一部である場合、第二に、社会的生産物全部が、生活を確保するのにぎりぎりである場合にだけである。こうして、ついに全ては再び社会的な生産物の量に帰することになる」と説明している⁽³⁶⁾。

続いて、上記の第二に示される社会的生産物の発生に着目するセミョーノフは、「社会的生産物が発生するや否や、その量は生産諸関係の性格を決定するおもな要因となった。共同体関係の出現を必然的なものにした生産活動の特徴はしだいに重要性をなくし、社会の成立が完了した後は、生産諸関係の性格に全く影響をおよぼさなくなった。社会的生産物の量は、生産諸力の発展水準の指標である。したがって、生産された社会的生産物の量による生産諸関係の性格づけは、ほかでもない生産諸力の発展の水準で規定されてしまう。したがって、既に原始人群社会の段階に、生産諸関係の性格は生産諸力の発展水準によって規定されていた⁽³⁷⁾」というように三段論法的に、当時における社会的生産物の量と、量に向けての生産諸力の発展水準の重要性を説明している。同時に、生活を保障するための生産物というこ

とに着目し、彼は「社会的生産物全体が生活を保障するためのものであった場合には、集団の全成員に最低生活の食糧を保障するためには、集団の各成員が最大限に努力しなければならなかった。たとえば、狩猟者は自分自身が食べるだけの獲物に満足してははいられなかった。彼らは、集団の残りの成員が彼らと同等の肉を取得する権利をもつことになる、ということを知っていた。彼らは自分自身だけでなく、原始人群社会に食物を保障しなければならなかった。これは必然的に狩猟の成果をあげるように、彼らに仕向けられた」⁽³⁸⁾と述べ、生産物に対して成員各人が所得する権利を得ていたということを指摘している。

特に、狩猟の獲物の増加に対する要求が極端な形で現れたのは、共同体的関係が成立した最も初期、すなわち狩猟への直接参加者が受け取る肉の分け前は、以前よりも少なくなった時であると考えられる。

(39)

そして狩猟の獲物の量は、後期前人から原人への移行にともなって実際に増加したとされ、このことに関して、セミョーノフは、オールドヴァイ峡谷での遺物の状況を例示している。⁽⁴⁰⁾つまり、狩猟の効率を高める最も有力な方法の一つは、そのときに使用する道具をより完璧なものにすることであるが、それは、本来の生産活動の進歩なしには不可能であった。このように共同体的関係とともに、生産活動に対する全く新しい刺激が生じた。それは、生産する生物の生物学的本質に根ざしたものではなく、彼らの集団の基礎をなしていた生産諸関係の機構に根ざしていた。一度発生した生産諸関係は、生産活動を発展させる原動力となった、ということである⁽⁴¹⁾。この生産活動の発展に関して、セミョーノフは以下のように解釈して、同時に、生産活動と共同体関係との関連についての独自の考えを示している。

生産活動の発展は、第一に道具の進歩、第二に、道具の生産に一層適応するように、道具の製作をする人々を変えることが前提となっていた。既に指摘したように、社会のなかで生活している生産する人々は労働手段とともにこの社会の生産諸力を形成している。生産諸関係は、それ自身が形成する過程で、それとともに形成し始めた社会の生産諸力を発展させる刺激になった。一方、形成しつつある生産諸関係の作用のもとで形成しつつあった生産諸力は、必然的に、既に到達した生産諸関係のレベルと矛盾するようになり、その一層の向上を要求したのであろう。こうして共同体的関係の出現にともなって、完全な、かつ正確な意味での生産が発生し始めた。生産、もっと正しくいえば社会的生産は生産諸力と生産諸関係のきり離しえない統一である。したがって生産諸関係が形成し始めるまで、生産は存在せず、生産活動のみが存在していた。⁽⁴²⁾

生産を生産諸関係からきり離して考察しても、その場合でさえ、生産は狭い意味での生産活動、すなわち、道具の生産には帰せられない。生産活動は以前にも狩猟と結びついてきた。しかし、その関係は、外面的な性格を帯びていた。共同体的関係が出現させることによって生産活動は、狩猟やそれとともに生まれた採集の生産物の分配を決定するようになり、また、そのときに狩猟や採集とともに狭い意味での生産過程を形成し始めた。同時に道具の製作、狩猟と採集は、分配、消費にともなって広い意味での生産となった。生産過程にはいった狩猟と採集は、生産活動の特殊な形態、すなわち消費手段の生産となり、道具の生産活動は生産手段の生産として現れた。⁽⁴³⁾

生産活動の進展について改めて着目すると、人類と社会の形成の全期間を通じて、生産活動は、社会

法的法則性の作用の結果、ますます発展し、形成しつつある人類の身体的形質と矛盾するまでの状況に至ったということである。つまり、生産活動は、これらの人類の身体的形質と直接に不調和になり、生産活動の進歩は身体の特定の器官が変化することなしには不可能になったことと同時に、生産活動はそれらの器官と副次的に矛盾するようになったのである。この状況下、生産活動のその後の発達、思考と言語の前進なしには不可能であったため、脳の構造の進化が求められたといえよう。⁽⁴⁴⁾

これら矛盾に対する克服について、セミョーノフは、「生産的共同体＝個体淘汰という一形態」を提示している。⁽⁴⁵⁾ つまり、「生産的共同体＝個体淘汰に先行する群居性＝個体淘汰は、後期前人の段階では既にかんりの程度生産活動に従属してしまい、このことは、それを生産的とよぶ根拠を与えた。共同体＝個体淘汰は、最終的に形成し始めた社会的生産に従属するようになり、生産の要求に完全に奉仕し、その要求を遂行し始めた。そして生産的共同体による個体淘汰を通じて、生産は生産力と人間を形成していった」⁽⁴⁶⁾ ということである。

しかしながら、生産活動は、発展する過程で人類の身体的形質のみでなく、発展段階の状況にある共同体における諸関係とも矛盾するまでになったのである。その後の展開について、セミョーノフは「人類社会が完成した後、数千年が経過しても、共同体関係は生産諸力の発展のレベルに依然として照応しつづけた。しかし、問題は、共同体的関係がまだやと形成しつつあった、という点にある。共同体的関係は、動物的個体主義と執拗に闘争しながら形成された。少なくとも肉、ついで食物全体の分配の分野において存在していた順位制は、しだいに消滅した。しかし、動物的個体主義の再発は、その後の期間においても生じていた現象であった。生産活動の発達、その当時までに形成しつつあった共同体的関係が到達したレベルと、必然的に矛盾するようになり、そのレベルの向上、共同体的関係の成立への継続を求めた」と論じて、生産活動の発展に比べて、共同体関係の成立が遅滞していた点を指摘したのである。⁽⁴⁷⁾

生産活動の発達は、同時に原始人群共同体の客観的利益としての生産の利益に、人々のその他の活動領域が従属することを前提とするように求めたことは必然的であった。これは社会的意志、道徳に先駆けた働きの拡張、新しい社会的規範の発生であった、とされる。セミョーノフは「全ての生物学的本能行動に対する社会的規制の確立、生物学的関係の社会的諸関係による入れ替え、それらが複雑で、困難な過程であったことは十分理解できる。社会的なものは、生物学的なものとの執拗な闘いで根づいたのである。生産の機能と発達、したがって、原始人群社会の存在自体をおびやかした動物的個体主義のぶり返しも、絶えず可能性があり、また、それが現実におきたのであった」⁽⁴⁸⁾ と言及し、生物学的な本能に対する社会的なものという対立関係を指摘したのである。このことは、原始人群社会における、共同体の存在より生産活動の存在が優位に立っていたという状況を改めて確認させるのであった。

原始人群共同体の淘汰の問題

セミョーノフは原始人群共同体の成員の衝突に着目している。つまり、成員の衝突は、形成しつつある人類集団の崩壊に導かなかったにしても、特別に危険なものであった。これらの衝突は、共同体の生産活動を破壊し、共同体の環境に対する適応を減少せしめ、生産活動の発展を阻害した、ということである⁽⁴⁹⁾。そして「共同体が正常に機能することを可能にしていた動物的個体主義の抑制の程度は、共同体が進化のある段階にとどまるうちは、生産活動の発展に準じて不十分であった。生産活動は、発展し

て、原始人群社会における社会的諸関係の形成のレベルと必然的に矛盾するまでになり、このレベルを向上させ、集団の団結の程度を強めることを求めた。生産活動の発展の要求と、共同体内にあった諸関係との間の矛盾は、共同体＝淘汰として特徴づけられる淘汰の一形式でも少しも克服されなかった」⁽⁵⁰⁾とセミョーノフは捉える。換言するなら、この矛盾を克服できない原始人群共同体では、動物的個体主義の複成と衝突の繰り返しによって、このような共同体は消滅したということである。しかしながら、この消滅は全成員の死を必ずしも意味しなかったのである。つまり、共同体が独立して発展することが不可能なほど、その規模が小さくなった場合に共同体が消滅し、また、共同体が、いくつかの集団に分解し、それらが、既に形成しつつある社会的有機体ではなくなった場合にも共同体は消滅するという経過を辿るものの、この種の集団は、一定の期間、大きく衰退することなく存在していたということである。⁽⁵¹⁾ 更に、ここに示す状況は、「原始人群共同体のこれらの遺存は再結合し、新しい形成しつつある社会的有機体を形成したことも、十分に考えられる。これらの遺存、あるいはその個々の成員が、既に存在している共同体に加わることもありえた。あれこれの小集団の人数が増大し、それが共同体になったことも完全に否定できない。だが、それがおきたのは最もよい条件の場合だけである。成立した社会的有機体は進化し、その後の分裂によって新しい社会的有機体を生み出すことができ、また失敗した場合もある。後者の場合には、それは消滅し、その成員は死ぬか、別の共同体に吸収された。生存闘争において、さらに発展することができたのは、上記の矛盾をうまく克服できた共同体のみである」というセミョーノフの分析へと繋がるのである。⁽⁵²⁾

これらの共同体では、それらの成員を拡大再生産するために適当な条件がつけられたのである。これらの共同体の成員数が最大の大きさを超えたときには、それぞれの共同体は二つの娘共同体に分裂したとされる。こうしてできた共同体は、新しく形成しつつある社会的有機体の始まりになったのである。⁽⁵³⁾ セミョーノフは「全体として、原人では、新しい共同体が発生する過程は、共同体が崩壊して進化から脱落する過程に比べて優勢であった。以前には人々がいなかった地域に彼らが移住したことは、原人の人口、したがって共同体の数が増加したことを物語っている。彼らの生息地域で、彼らの遺跡の数が時間を追って増加していることも、それを物語っている。」と遺跡資料等の分析についての解釈を行っている。⁽⁵⁴⁾

上記に述べられた「淘汰」とは、ある共同体を崩壊させると同時に別の共同体を創りだし、形成しつつある人類を絶えず再編成したということである。人類と社会の成立の第一段階では、絶えざる原始人群共同体の衰滅と発生、分裂と結合、成員の入れ替えと混合が必然的な現象であった、⁽⁵⁵⁾とされている理由がここから理解できる。更に、共同体の成員の入れ替えは、人類の身体的形質の進化にとりの適度な条件をつくったとされる。セミョーノフは「人類の身体的形質の進化は、生産活動自体の発展のみでなく、共同体の団結性のレベルを高めるための必要条件であった」と論じると同時に、「一定の時間の間、社会的諸関係のその後の形成、社会的意志の影響範囲の拡大は、人類の身体的形質の変化なしに生じえた」という状況を加味しつつも、「社会的意志は、個人の意志の形で現れるときにのみ存在しえた。個人が自分自身の行動本能を規制することができなければ、社会的規制はできない。それゆえ、早晚、その後における集団の団結性のレベルが向上することは、より一層、個人の意志の形成なしには不可能になった。そして、このことは、他方では脳の構造の進化が前提になった」と述べている⁽⁵⁶⁾。まさに、セミョーノフは共同体形成の前提条件としての「人類の身体的形質の進化」という位置付けを行ったのである。

ただし、「生産諸関係の作用の下で発展しつつあった生産活動は、それに従属する共同体＝個体淘汰によって、人類社会と同時に、生産諸力と社会的存在でもある人類そのものも形成していった。生産活動は、共同体＝個体淘汰を出現させることによって、人類の生物学的進化を人類社会成立の契機の一つに変えた」ということもセミョーノフは言及し⁽⁵⁷⁾、共同体形成と身体的形質の進化という二項の狭間における、生産活動の重要性を指摘している。すなわち、「原始人群共同体は、それが出現したときから、もはや生物学的結合体ではなく、生物学的法則とは異なる法則にしたがって発展する特別な種類の有機体になった。しかし、それは、真の社会有機体にはならなかった。原始人群共同体の進化は、人類の生物学的進化なしには不可能であった。共同体のなかでは社会的法則でなく生物学的法則も作用していたが、後者は従属的な役割を果たしていたにすぎない。原始人群共同体は形成しつつある社会であった。原人の共同体もこの形成しつつある社会的有機体の最初の形態であった。」⁽⁵⁸⁾ ということである。

第2節 人類社会発生の原像

人類社会の成立の最終段階

原人の段階から旧人の段階への移行は、約 20-30 万年前のミンデル・リス間氷期に生じた。体型の変化は、形成しつつある人類の生産活動の発達、まさに、その他の全ての生産形態の発達にとって、新しい可能性を開いたとされている。⁽¹⁾ また、後期アルケオリスへの移行は、先行する時代の特徴的な石器の画一性が終了したことを意味していたとされ、互いに異なる特殊化した多くの文化が現れた時期であり、同時に、定住地の数が激増したのは、人口がいたるところで急増したのであった。⁽²⁾

セミョーノフは、体型の変化に関して、「新しい体型の人類は、その祖先の原人が定住できなかったような地域を開拓した」⁽³⁾ として、定住地数の増大の根本的な理由を挙げ、「アフリカでは、この時代に属するのは、一方では熱帯林、他方では、現在、アフリカの角（現在のエチオピア・シブチ・ソマリアが所在する地域）、および北西のアフリカの砂漠、半砂漠地域で、そこには定住したことを示す資料がある。」と述べている⁽⁴⁾。そしてセミョーノフは以下のように地域に関しての具体的な情報を提供している。

この時代にアフガニスタン、イラン、イラク、トルコ、ザカフカス、カフカス、東南アジア全域、南中国に人類が生息していたことは疑いの余地がない。北に進んだ旧人は、内陸アジア、カザフスタン、シベリア南部（アルタイ、ハカス、トゥーバ、沿アンガラ南部）および極東（アムールとゼエヤ河流域）、モンゴル、朝鮮、日本に住みついた。彼らの生活圏に東ヨーロッパのかなりの地域が含まれていた。旧人は北緯五〇度以南のボルガ河までのソ連ヨーロッパ地域に定住した。デスナ河流域（ホトイレヴォ、ベトヴォなど）、オカ河上流、ボルガ河中流沿岸地方（クラスナヤ・グリンカ、トゥングース）その他の一部の地域における個々のムスティエ期の遺跡はさらに北にあって、それは北緯 55 度にまで達していた。チュンヴァヤ河（ペルム州）のペシ Cholヌイ盆地で、ムスティエ期の石器が発見されたことは、旧人がさらに北と東へ浸透したことを物語っている。ソ連ヨーロッパ地域とアジア地域のムスティエ期の遺跡を結ぶ一種の環を呈しているのは、南ウラルのマグニトゴールスク市付近

にあるムイソーヴァヤ遺跡である。⁽⁵⁾

これらは中央アジア史の始点ともいえる部分の説明である。定住地の変遷という意味で、これらの記述は遺跡発掘の成果に即した重要な判断を行っているといえよう。これ以降の論考は、ここに示される地域の内実について着目することになる。すなわち、その内実の一部として挙げられるのは生産活動の実態についてである。

セミョーノフはこの時代の石器インダストリー（製作）の進化に着目する。石器インダストリーの進化は、ヨーロッパの資料でとくにはっきり追跡できる二つの主要な段階に区分できるとして、以下のように区分する。「第一段階に属するのは、中期アシュール、後期アシュール、プレムスティエ、および前期ムスティエのそれぞれの文化である。それらの文化が存在した時代は、ミンデル・リス間氷期の後期、リス氷期、およびリス・ヴルム間氷期である。これは、ネオアルケオリス前期である。第二段階にはいるのは、後期ムスティエ文化である。それが存在した時代はヴルム I 亜氷期（フランスの考古学者の年代区分ではヴルム I、ヴルム II の亜氷期）とヴルム I・II 亜間氷期の一部である。その絶対年代は、7.0-7.5 万年前から 3.5-4.0 万年前までである。これは、後期アルケオリスである。」⁽⁶⁾ と先述の区分に則した上で、考古学的な歴史区分が提示される。すなわち、中期アシュール、後期アシュール、プレムスティエは後期アルケオリスを細分化したヨーロッパにおける歴史区分であり、アフリカの区分における前期石器時代に該当し、前期ムスティエは中期石器時代に該当する。⁽⁷⁾

後期アルケオリスの時代には、石器とならんで骨器も使用されたが、全体として骨の加工はあまり発達してなかった。ムスティエ期の遺跡では、主として初歩的な錐、大針、尖頭器、筥に使用された鋭い動物の骨片がみられる。⁽⁸⁾ この点に関して、石器インダストリーの発達にともない、狩猟の武器も発達したことに、セミョーノフは着目し、以下のように遺跡の考証を行っている。

これまでの木製の槍が使用されていたが、それは、より完成したものになっていた。後期アシュール文化に属し、リス・ヴルム間氷期の時代とされるレリンゲン遺跡（西ドイツの下サクソニア）では、ゾウの肋骨の間からイチイの木製の長さ 244 センチ、周囲八四ミリの槍が発見された。その先端はとがり、火で焼いてあった。そして、その前部には先端に向かって走る数本の縦の溝があった。よりしっかり握れるように槍の中央部には狭い数本の切れ込みの跡があった。カランボ瀑布（ザンビア）の近くにある後期アシュール文化に属する遺跡では、木製の道具、すなわち掘り棒、ナイフ、棍棒が発見された。その製作には火が使用され、火によって必要な形と堅さがあたえられた。これらの道具が発見された遺跡の年代は、最初 6 万年といわれていたのが、いまでは 19 万年とされている。中央アフリカの遺跡の一つで、石製尖頭器のついた棍棒と思われる道具が発見された。チャムブゥアク鉱山（アンゴラ北東部）で、掘り棒、あるいは投げ槍の破片が、また、一端に刻み目のある曲げられた投げ槍の残片が、フロリスバッド文化層の一つで発見されている。⁽⁹⁾

後期ムスティエ期には組合せ式の狩猟用道具があったのは疑いない。トリエスト（イタリア）のパカール洞くつの発掘のさい、ムスティエ期のフリント製尖頭器がつきささったクマの頭骨が発見された。おそらく、この道具は武器としての斧の先端であった。長さ 11.7 センチのフリント製槍先がザスカリナヤ職（クリミヤ）のムスティエ期の一つで発見された。ラ・キナ洞くつ（フランス）の発掘で

はフリントの破片がつきささっていた骨が発見された。この傷の特徴をくわしく分析した結果は、この破片が槍先のもので、狩猟動物の骨につきささったものであることがわかった。⁽¹⁰⁾

これらに見る遺跡からの情報からも分かるように、狩猟武器の発達は多種多様な手法をもってなされたのである。特に、注目すべきは火の使用によって、武器類の強度が増したことであろう。火の使用とかつてから行われていた狩猟武器の改良によって、狩猟に向けての有効な手段を人類は手に入れたといえよう。

すなわち、武器の進歩は、経験の蓄積と集団の団結性の増大とともに狩猟の効率の向上をもたらした。この時代に属する遺跡で、大量の動物の骨の集積が発見されているのは、そのことを証明しているのである。加えて、セミョーノフは「この時代にほとんどどこにでも人類集団の狩猟活動の一定の専門性が認められる。あれこれの共同体の狩猟対象になったのは動物の特定の種である。とくに多いのはクマである」⁽¹¹⁾と分析し、クマを対象にした狩猟の事例を地域ごとに以下の通り細かく示している。つまり、それらは「ツウツフヴァド（グルジア）洞くつの後期ムスティエ期層、サカジア洞くつ（グルジア）、ボロンツォフスカヤ、アフシトイルスカヤ、ナヴァリシェンスカヤ、アツインスカヤ、ホスティンスカヤ（すべてカフカスの黒海沿岸）イリンカ（北・沿黒海）、テムナヤ（ポーランド）、シイプカ（チェコスロバキア）、イグリタ、ツイクロヴィナ（両者ともルーマニア）、ヴェリカヤ・ペシナ、ヴェテルニカ（両者ともユーゴスラビア）、ポカラ（イタリア）、ドラヘンゲレ、ザルツォフェン（両者ともオーストリア）、ヴィリドキルフリ、ドラヘンロッホ、ヴィリドマニリスロッホ、コテンシェル（すべてスイス）、クメトスロフ、ハイレンライト、ペテルスホーレ、カルトシュタイン、イルプフェリードホーレ、ジルゲンシュタイン（すべて西ドイツ）、レグルドゥ、クリュニイ（両者ともフランス）、シウバユク洞くつ上部層、エルド遺跡（両者ともハンガリー）では後期ムスティエ層でクマの骨が大半を占めていた」というように示されるのであった。⁽¹²⁾

次いで、クマ以外の動物に関しては、「シカ化石片はザルツギッターローベンシュテット（西ドイツ）、ペシュ・ド・ラゼ、ラ・シャペル（両者ともフランス）、アゴスティノ、マリノ・ド・カメロタ（両者ともイタリア）に、野牛はヴォルゴグラード、イリー（両者ともクバン）、ローシキエ I、II（沿アゾフ海）では、ツウツフヴァット洞くつ系の前期ムスティエ層にある。牛はラ・フェラシーとル・ムスティエ中部（フランス）、スフル（イスラエル）。ウマはヴァリハノブ（南カザフスタン）、ラ・ミコク上部層とゲヴル（フランス）に、マンモスはモロドヴァ V（沿ドニエストロ）、タタ（ハンガリー）、モンドリ（フランス）に、高地山羊はシウバユク（テシク・タシュ）、アミル・テミル（ウズベキスタン）に、野生ロバはスタロセリェ（クリム）に、野生羊はアマン・クウタン（ウズベキスタン）に、ガゼルはアムッド（イスラエル）に、鈴羊〔ウシ科〕はアジイ・コバ、ママト・コバ、ボルチェ洞くつ中部層など」というように細かく地域が例示される。⁽¹³⁾

しかし、セミョーノフは「遺跡の動物の骨の大半が特定の種で占められていることは、そこにいた集団がその動物の狩猟を専門にしていたことを必ずしも証明してない」⁽¹⁴⁾と改めての確認を行う。つまり、個々の人類集団は、狩猟だけでなく、漁労にも従事していたということであり、ナイル河流域とヨーロッパに住んでいた旧人は漁労に従事していたという事例が見受けられる。その証として、クダルエ（南オセチヤ）のムスティエ期層には大量のサケの骨が発見されていることが挙げられよう。ただし、セミョーノフは生産活動と結びついた狩猟に関して、次のように結論付ける、「氷河の拡大期に、ヨーロッパ

の氷河に直接隣接する地域に住んでいた旧人にとって、狩猟の役割はとくに大きかった。彼らの間では、多分、狩猟がおもな生存源であったに違いない。北極圏に住んでいる現在の狩猟民は、採集経済部分が全食料の10%以下である。残りは狩猟と漁労でまかなっている。旧人では、気候が温和であればあるほど、採集はより大きな役割をはたしていた。温暖、および高温の気候の地域に住んでいた形成しつつある人類では、採集による生産物が、多分、依然として食糧の大半を占めていたことであろう。一更に、火を使用していた確実な証拠が、アフリカを含めて当時の人類の生息していた世界のすべての遺跡で発見されている。この時代には、すでに人類が発火技術を会得していた、と考える根拠がある」⁽¹⁵⁾。つまり、前期旧人から後期旧人への転化は、石器インダストリーの進化を伴う一つの段階であり、全体としては、明らかにより高い段階への移行と関係があったということがいえる。

しかし、前期旧人と後期旧人への交代は、生産活動、一般に経済的生業活動の発達における進歩だけをともなっていたわけではなかったことを、セミョーノフは指摘する⁽¹⁶⁾。社会的諸関係の形成の極端な転換期における、その他の側面とは、共同体内での生死に関する「異常」事態のことである。つまり、それは、古人類学と考古学の資料が証明しているように、前期旧人の共同体において、日常の殺人、食人がかなり広く行われていた、ということである。セミョーノフはこのような状況の一例を挙げている。「シュタインハイムの頭骨は、死にいたる強い打撃でこわされ、切開されていた。エーリングスドルフの頭骨でも、棍棒、するどい石器による数個の傷跡が発見されている。これも脳髄をとりだすために切開されていた。鈍器による致命的な打撃は、フォンテシヴァードの頭骨の一つでも発見されている」⁽¹⁷⁾。更に、後期旧人の化石骨は前期旧人の場合もはるかに多く発見されている。しかし、多少とも明確な殺人と食人の痕跡が発見されるケースははるかに少ない。西ヨーロッパにおける古典的ネアンデルタール人の化石骨の中では、二例のみであるとされている⁽¹⁸⁾。

これらの状況に鑑みた上で、セミョーノフは、ヨーロッパ以外のザグロス山地（イラク）のシャニダール峡谷で発掘された化石骨に着目する。つまり、「シャニダールⅢ人は、左の第九肋骨に鋭い、おそらくは木製の道具による切り傷があった。それは肋骨の上部を貫き、肺を傷つけた、と思われる。小ぜり合いのときに、右手に武器をもったものに横から傷つけられた、とみられる。切り傷が生前に加えられたことは、はっきりした治癒の痕跡が証明している。この人間は数日、あるいは数週間は生存していた。若干の研究者の考えによれば、シャニダールⅢ人は治癒の過程の余病で死んだのである。シャニダールⅢ人は集団の保護下にあり、集団は彼の負傷に気を使っていたことが伺える。」というように⁽¹⁹⁾、セミョーノフは他者への治癒行為が存在していたことを、他者との共存意識の表れとして重視しているのである。

加えて、セミョーノフはシャニダールⅣ人の埋葬場所の発見とその場所の土壌研究は、後期旧人の精神生活を明らかにする大きな要素を含んでいたとして、とりわけ人間以外は、持っていないとされる情動が発達していたことに着目している⁽²⁰⁾。つまり、墓に供えられた8種の植物の中で5種は薬草で占められ、一種は食用、別の一種は薬草、かつ食用でもあったということであり、このような花の選択は、後期旧人がこれらの植物の有用な性格を全て知っていたことの証明であると同時に、他者への治癒行為に通じる、死者への情動の表れであるということができる。また、セミョーノフは「埋葬はシャニダール人だけのものではない。それは、ほかの後期旧人の遺跡でも発見されている。だが、後期旧人だけのものである。前期旧人には埋葬跡はない。換言すれば、埋葬は前期旧人から後期旧人への移行にともなうのみ生じたのである」⁽²¹⁾という説明を加え、前期旧人から後期旧人への進化の中で埋葬の文化が生

じたとしている。そして、これらの状況を示す極めて如実に語る遺跡の様子を以下のように提示する。

興味ある発見がA・ガッターリにより、イタリアのモンテ・チルチェオ洞くつでされた。洞くつは、いくつかの部屋からなっている。主室は明らかに生活用であった。特に、湿気を防ぐために石が敷かれていた。だが、研究者が最も注目したのは、その点ではなく、明らかに人間が住んだことのない洞くつの一室である。この半円形の部屋の中央には、土台の上に典型的ネアンデルタール人の頭骨が載っていた。それは年齢45歳の男子頭骨であった。頭骨のまわりには円形に石が置かれていた。頭骨にはニカ所に損傷がみられた。頭部右側にあるその一つは、なんらかの道具で打たれたものであった。この作業は全て部屋の外で行われている。というのは、部屋には骨格や頭蓋底の破片が発見されていないからである。これらの作業のあと、この頭骨はわざわざ洞くつの中央部に置かれ、石で囲まれたのであり、それゆえこの場合は儀礼的埋葬がされた、と解釈できる。⁽²²⁾

他の場合には、骨格のそばに動物の骨の一部が発見されている。ラ・シャペル人の骨格の右側には、解剖学的に正しい配置でウシの脚の骨、また背後にも、おなじく解剖学的に正しく配置されたシカの脊柱の骨、および種々の骨が置かれていた。人の骨格とともに、大型のイノシシの下顎骨が発見された。発見の状況から、この下顎がわざわざ遺体と共に置かれたことは旧人が死者に食物を供えた、という結論がでる。骨格とともに発見された種々の道具も、遺体にのせられた可能性がある。この場合、ネアンデルタール人が食物だけでなく、道具類も供えた、ということができる。これら全ての事実を、一部の学者は、埋葬が死者の霊魂と、来世の生活が存在することに対する旧人の信仰が出現した、という見解を、根拠づけるのに使っている。⁽²³⁾

セミョーノフは以上のような多くの関心を持する状況説明と解釈を行い、当時の共同体内の状況を分析しており、「死者の骨格とともに動物の骨の一部や道具が供えられたことは無視しても、そのような場合でさえ、埋葬の存在は、第一に、死者に対する配慮以外に説明のしようがない。集団の生者の死者への配慮は、集団の生者間同士の配慮が生まれないう限り生じなかった、というのは明らかである。民族学の資料が明らかにしているように、前階級社会の段階にある種族では、死者への配慮は、死後でも集団の成員である、とみなされつづけたことで説明される。後期と最末期の旧人の死者に対する配慮は、死者を集団・旧人の共同体の完全な一員であった、と推定することが適当であろう」と説明している。⁽²⁴⁾

そして、次のような着目すべき解釈を加えている。埋葬によって、「死亡した集団の成員と、集団との関係を意識することは、生存している成員間との関係、すなわち人類の集団の統一意識なしにはできないことである。人間は死後でも集団の一員とみなされていたので、集団内部の関係を規制する規範が、死後でも彼らに作用しつづけた。旧人の共同体の各成員は、集団の生活場所の洞くつ内に残された。共同体のそれぞれの成員は集団の獲物の一部にも権利をもっていたので、死者のわきには割り当てられた分け前が置かれた。死者は、また、集団の所有である諸道具に対する権利も死後もちつづけた。遺体と共に道具が発見されるのはそのためであると考えられる」。⁽²⁵⁾つまり、死後を問わない共同体内の統一意識や規範が成員同士において存在していたということである。加えて、死者に対する恐怖ということも存在していたことは、民族学の資料で裏づけられているとして、セミョーノフはその要因について「第

一に、屍体から発する危険な影響は、無条件的な、自律的な性格を帯びるものとして、第二に、まずは死者の近親者、すなわち最初に死者と同じ住居に住んでいた人々を脅かすものとして、第三に、死後の比較的短期間、普通は屍体の腐敗の過程が生じる期間だけ存在し、この期間の終了後に跡かたもなく消え去るものとして、第四に、伝染性のものとして考えられた。死者と接触した全ての人々と器物も、この有害な影響に感染し、屍体と同じようにその感染源になる。」⁽²⁶⁾ というように数点を挙げている。

これらの後期旧人に埋葬が出現した理由を纏めると、その一つは、死者を住居に留め、自分たちの集団の成員として、それに食物や道具を供える気持をおこさせた配慮であり、もう一つは、屍体を縛り、穴にいれ、土をかぶせるようにする屍体への恐怖である。本当の意味の埋葬が出現したのは、死者から生じる危険を実際に認識してからである。だが、この危険は直ぐに認識されなかった。そのためには一定の期間が必要であり、その期間、遺体は住居内にとどめられていた、ということである。この埋葬と共同体の成員との関係について、セミョーノフの以下のように総括する。

人類集団が統一体であることを意識し、集団の各成員に対する配慮を規制する規範が確立したのは、真の埋葬の出現に先行する時代であった。更に、社会の成立は、生産諸関係・物質的關係だけでなく、イデオロギー的諸関係でもあるという点である。イデオロギー的諸関係は意識を通してのみ形成される。したがって、社会的意識と意志の形成は、社会の成立の重要な契機である。社会的諸関係の形成に際する一定の発展段階において、原始人群社会の団結の一層の強化、その客観的統一の一層の増大は、原始人群社会の成員の統一性の意識なしには不可能になった。そして、この共同体の統一の自覚は必要なものになっただけでなく、現実化したのである。旧人の共同体の成員たちは、その実際の活動の過程で、彼ら全員が全体として単一の総体をなして、各成員の命運が残り全ての成員の命運と、つまりは集団全体の命運と密接な関係をもっていることをますます確信していった。⁽²⁷⁾

しかし、必要にもなった旧人の共同体における統一の意識化は、直接的なものとも、また妥当なものともなりえなかった。旧人が集団のなかで彼らを結びつけているのは生産であり、旧人の社会が本質的には経済的統一体であることを理解できた、とは考えられない。旧人の共同体を構成する全成員の統一の基礎に実在する経済的なものは、形成しつつある人類の頭のなかに、間接的（媒介的）、および妥当でない（幻想的な）形でのみ反映されえた。同時に、共同体の成員間に存在していた共通性の意識が、抽象的な形をとることはありえなかった。したがって人類集団における統一の最初の意識形態は、同時にまた一目瞭然たる具象的な性格や、間接的な性格、幻想的な性格を、同時に持っている必要があった。人類集団の成員における共通性の自覚形態の中で、最も原初的で、アルカイックな形態であるトーテミズムは、まさにこのような特徴をもっていたのである。⁽²⁸⁾

こうして、セミョーノフはトーテミズムと共同体との関連についての論考を行う。先ず、トーテミズムについての簡単な説明を加えると、トーテミズムは、その発端の形態では、種々の原始人類集団の全成員が動物の特定種の個体と同一である、という信仰であり、原始共同体社会の段階にあった種族間で最も広く普及していた。その種とされるものは、人類集団、したがってその各成員のトーテムである。トーテミズムでは具象的な形でその集団の全成員の統一性と、同時に、それ以外の人類集団の成員との差異が具象的な形で表現される。ネアンデルタール人の埋葬の分析によって、埋葬の出現の前史におい

て、人類集団の統一性の意識が生じたという仮定、および人類集団における統一性の意識の原初形態がトーテミズムであるという民族学の立場からの仮定は、考古学の資料からも理解を得られると、されている。⁽²⁹⁾

セミョーノフはトーテミズムの具体的な例を挙げている。「ウシ、水牛、ウマの頭蓋や頭骨を保存し、祭壇に供えるような風習が見られた。このような行動は、殺した動物に対する独特の呪術的、儀礼的な配慮であった。その目的は殺した獣に対する狩人の罪をあがない、その肉体が復活繁栄するのを保障することである。これらの儀礼の分析は、その原初形態がトーテミズムと関連していたことを示している。この結論は、ドラヘンロッホ、ヴィルデンマリンスロッホ、ペテルスフェルス、ザルツオッフエン、クー・ユニ、ル・フユルテン、ルグルドゥ、イリンカ、イリスカヤ、スフル、テシク・タシュにおける遺物の一つの特徴によって、裏づけられている。それは、前記の各遺跡では、儀礼的な配慮の対象がある一つの種の動物のみで、しかも、全ての場合に、それらの遺跡で大半を占めていた動物の頭と骨であった、という点である」⁽³⁰⁾ というように具体的な遺跡を挙げて、我々に各遺跡の発見とその研究成果を参照するように要請している。

加えて、「原人から旧人への移行にともなって、人類集団の狩猟活動に一定の専門性が認められた。この専門性は、もちろんトーテミズムの発生をもたらすことはなかった。だが、集団の成員の統一性を意識することが必要になった場合には、狩猟活動の専門性は、トーテミズムの形成をおし進めたに違いない。最もよく集団のトーテムになったのは、その成員のおもな狩猟対象になった動物種である。この種の動物の肉はトーテム共同体の主要な食物であった。これは、トーテミズムにとって、その集団の全ての成員、およびその種の動物の全個体は同じ肉体と血をもっている、というトーテミズムに特徴的な自覚の形成をうながすことになった」⁽³¹⁾ としており、まさに、トーテミズムの発生は、その共同体のどの成員もトーテム動物とみなされるようになり、トーテム種の各動物は共同体の成員とみなされるようになったことを意味しているということである。同時に、トーテミズムの発生は共同体の成員間の関係をコントロールする全ての規制、特に成員への配慮がトーテム種の動物にも及ぶことを前提としていたのである。

社会的意識の発展レベルでは、後期旧人は、明らかに前期旧人よりも高い段階にあった、ということは、明らかである。しかし、最も重要な点は、後期旧人が社会の発展全体のレベルでは、前期旧人に比較して高かった。この点で後期旧人は、人類社会の形成のうえでは先行する段階に合法的にとって代った、新しい、より高度の段階の代表者であると考えられる。セミョーノフは「新人へ向う道から後期旧人がそれたことは全くありえない。進歩、しかも巨大な進歩であったことも、また、社会的諸関係の発展の点でも、後期旧人は現生人類の先行者であったことが確実である。全ての資料が証明しているように、後期旧人の共同体は強く団結した集団であり、その全ての成員は、互いに配慮を示した。後期旧人の共同体は、単に統一した集団であったばかりでなく、(トーテミズムの形態で) 自らの統一性を自覚したものであった。しかし、人類集団のこの自覚は、同時にまた、必然的に諸集団の全成員が、別の全ての人類集団とは異なることも意識した。」と解説している。⁽³²⁾

そして共同体の成員としての人類は、トーテミズムが出現する以前には、異なる共同体の成員間の差異を、別集団の成員間の差異として意識されていたにすぎないとされている。一つの共同体から別の共同体へ移ったとき、その人々は、最初の共同体の成員とみなされなくなり、第二の共同体の成員とみなされるようになった。この場合、第二の共同体の成員は、その人々が自分たちの共同体出身ではなく、

外部からの他者ということを知っているものの、第二の共同体の成員は、その他者を別の集団ではなく、自分たちの集団の成員と快く見なしていたのである。トーテミズムが出現するのにもなって、集団内で生まれた人間は、同じ集団の残余の成員と同じトーテムをもち、彼らと同じ肉体と血をもち、同一の「肉」であり、そのために、そのトーテム群に属するという意識が生まれたのである。そして、別の共同体の成員であるとの判断は、単に別の集団の一員という認識ではなく、その成員は別のトーテム、別の肉体、別の血を所持しているとの認識が先んじてることになったのである。⁽³³⁾ セミョーノフはトーテミズムの出現に伴う、共同体内外の状態を以下のように説明している。

人類は、一つの特定の集団すなわち自らが生まれた集団に属する印を、一生を通して自分の身体に帯びるようになった。トーテミズムの出現にともない、異なった共同体の成員との間は、はっきりとした一線で画され、それを越えることは原則的に不可能であった。一人のものが一つの共同体から別の共同体へ移行したとしても、原則的には、彼は部外者でしかありえなかった。自分たちの統一性も、また別の同様な集団の成員との差異性も、自覚した成員の強固に団結したトーテム集団に共同体が転化したために、集団自体は閉鎖的になった。旧人の集団の編成替え、混合が中止された。もちろん、後期旧人の閉鎖性を絶対的なものとみなしてはならない。任意の共同体で生まれた個々の、人々、あるいは個々の集団が別の共同体にはいることもありえたが、例外的であった。⁽³⁴⁾

一定の数の集団にみられる物質文化の統一性は、最初は異なる文化をもっていた共同体における相互の影響の結果では生じえない。この統一性は、まったく別の方法で生じた。当然でてくるそれに対する唯一の説明は、共通の文化に差異が生じた集団は、発端の原初的共同体から何回も段階的に分化したためにそれが生じたことになる。換言すれば、文化の共通性とは、起源の単一性の結果なのである。一つの文化に属している各共同体は、共通性をつくったが、それは有機的な、統一的な、社会的な共通性ではなく、遺伝=文化的な同一さの形成であった。そして、この同一さの出現のみならずその長期にわたる存在は、それに属していた各共同体間の強固な関係とか、一般になんらかの必然性も前提としない。文化の結束を維持させたのは伝統の力のような要因であった。⁽³⁵⁾

これらの考証は、当時の共同体と共同体を結びつける共同性についての議論に関する多くの要点を与えてくれる。また、後期旧人の共同体が全て閉鎖的な集団であったとするなら、閉鎖の過程や、自己と他者が互いに孤立する過程が始まった時期は、それ以前、すなわち前期旧人の段階である。

フランスにおけるリス氷期以降に四つの文化、アシュール、タヤク、エベノ、プレムスティエ文化が存在することを指摘したA・リュムレイは、これら文化の荷い手であった人類が、何万年もの間、隣接して生活していたとはいえ、事実上、彼らは互いに相手を知らなかった、とされている。相互的な影響は生じたとはいえ、極めて稀であったとしている。⁽³⁶⁾

そのような状況の中で、原始人群共同体に進行しつつある閉鎖、原始人群共同体の相互が隔離された状況は共同体を血縁集団に転化させたのである。そのような血縁集団としての特質に関して、セミョーノフは「同血統繁殖（つまり近親交配）は、かなり密接なもので、共同体が比較的小規模だったために、旧人の身体的発達に影響を与えたのである。その結果、必然的に彼らの遺伝的基礎の結合が生じた。旧人の身体的形質は、進化の可逆性を失い、保守的な性格を帯びた。そのため、旧人の身体的形質の顕著

な改造、進化は不可能になった。これに応じて共同体は個別的な淘汰が影響しなくなったとされる。もちろん、旧人の身体的形質が変化する能力を完全になくしたわけではなかった。不可能になったのは、その後の一層のサピエンス化と形態変化にしたがった進化、つまり、身体的形質の一般的水準の向上であった」と論究している。⁽³⁷⁾

概略として纏めると、共同体—個体淘汰の衰退にともなって、再び重要性をえたのは、普通の個体的自然淘汰であり、その過程において旧人の身体的形質の変化は、大きな体力の持ち主になる方向、一般的に粗大化する方向へ進んだのである。そして、すなわち現生人類へのコースからそれた方向へ進んだ。前期の、一般化したネアンデルタール人から後期の特殊化したネアンデルタール人への転化も、この結果であったとされる。⁽³⁸⁾

そして、上記に見るような、前期旧人から後期旧人への移行として現れた社会的諸関係づくりにみられる巨大な進歩は、予想外の結果をもたらしたとして、セミョーノフは「共同体が強固に団結し、したがって、閉鎖的で隔離された集団への共同体の転化は、近親交配をもたらし、したがってサピエンス化を不可能にし、その結果として生産と社会の形成の継続を不可能にした。人類と社会の成立の完了は、共同体の閉鎖性、それらの隔離の克服なしには不可能であった。そして事実が証明しているようにこの閉鎖性は克服されたのである。人類と社会の成立は完了した」と述べている。⁽³⁹⁾

つまり、共同体を培った素地として狩猟や狩猟のための生産が挙げられるが、その頃の状態に埋葬や死者への労りに仕向けられたトーテミズムが組み込まれ、より強固な共同体が形成されるに至ったのである。しかしながら、これらの過程は人類の進化の遅滞を促すという、換言するならば、人類社会成立への道と、人類の身体的形質の進化に向かう道とが、相容れないという状況を齎したのであった。

人類社会成立の完成

人類社会の形成は、動物的本能を抑制し、それに社会的な枠をはめることを必然的に前提としていることは明白であろう。セミョーノフは「食欲と性欲という二つの生物学的本能のうちで、原人の共同体で、完全に無秩序なものとして残ったのは、後者の性欲だけである。食欲は共同体の発達にともなって絶えず強まっていった社会的な抑制下にあった。したがって性欲の発現こそが、原人のみならず前期旧人において、形成しつつある人類のおもな衝突の原因になった、とみなす重要な根拠がある」と強調している。⁽⁴⁰⁾ そのような状況において、前期旧人から後期旧人への移行にともなって生じた社会的諸関係の激しい変化は、生活の全分野を包含し、性欲の働きをも抑制することを可能にしたとされている。つまり、旧人の間で、単婚が発生した可能性は極めて少ない。既に、完成した社会の初期の発展段階でも単婚は存在しなかったということである。ネアンデルタール人においても、集団婚が発生した可能性も少ないとされている。⁽⁴¹⁾

セミョーノフは、「民族学で知られている集団婚の全ての形態は、外婚と関連し、現在ある資料は後期旧人の集団の閉鎖性、すなわち内婚を証明している。そして、もし、外婚というのは、ほかの集団の成員とのみ性関係を結ぼう、という要求と理解するならば、この後期旧人の共同体では、その萌芽さえなかった。しかし、人類社会の形成は、氏族の出現で完了し、原始共同体が氏族共同体として発生した、とみなす大きな根拠がある。ここから後期旧人の共同体の発達こそが外婚を準備して、それを可能にし、不可避なものにした、ということが出来る」と述べており⁽⁴²⁾、共同体間における外婚の意味を重視している。つまり、社会の形成に向けての大半の期間は氏族の成立した時代であり、後期旧人の共同体にな

んらかの外婚の前提が存在したと考えることは可能であろう。

集団外の人々との性関係を結ばなければならないことが一般的な外婚と呼ばれる側面に対して、もう一つの側面は、同一集団における成員間の性関係の絶対的禁止アガミー、完全なアガミーであると考えられる。完全なアガミーは、外婚なしに制限することは不可能である。アガミーは、内婚の集団内においても十分に発生し、存在していた。民族学の資料は、集団の完全なアガミーと外婚に先行する部分的アガミーに関する論点を提供している。セミョーノフはその民族学からの提示を以下のように取り纏める。

多数の種族の部分的アガミーにおける禁止性タブーのなかの大部分を占めるのは生業的な性タブーであり、そのなかではっきりした優位にあるのは、狩猟-性タブーである。その本質は、狩猟準備期と狩猟の最中の性関係を、極めて厳格に禁止することである。この期間は様々である。すなわち、一日から数カ月におよんで狩猟・性タブーがみられる。全ての諸種族では、この期間の全体に性関係を禁止することは、狩猟を成功させるための必要な条件である、という深い信仰が存在していた。たとえば、レズ村（メラネシアのニューアイルランド島）の村民は、狩猟者の誰かがタブーを犯せば、犯したもばかりか、その仲間の全員が狩猟に不成功だ、と確信していた。アメリカ・インディアンのヌートカ族（北アメリカ北西岸）は、クジラ猟のときに事故がおきると、その原因は、狩猟者の一人がタブーを破ったからだ、と信じた。そして罪人を探しだし、それをきびしく罰したとされている。⁽⁴³⁾

ここにおいても狩猟作業という側面は看過できない。狩猟の役割が増大するにつれて、狩猟は、組織的な形態をとるようになった。すなわち、「本来の狩猟活動の前に多少ともながい準備期間が必要になり、その期間に、狩猟場の偵察、動物の追跡、狩猟計画の作成、狩猟具の製作と改良が行われた。狩猟の発達は、生産活動の結果に左右されて増大するようになった。したがって、狩猟の準備期間は、ますます大きな意味をもつようになった」ということである⁽⁴⁴⁾。セミョーノフはこの準備期間に着目し、準備期間がどのように進行するかによって、本来の狩猟活動の成立が左右され、狩猟の準備期間における共同体の成員間の衝突が危険であり、これらの衝突が、狩猟に参加する能力のある成員の人数を削減させることがなかったにしても、衝突による損失は大きかったと捉えている。⁽⁴⁵⁾ また、これらの衝突は、狩猟の準備活動を混乱や中断を余儀なくされ、狩猟の機会を減少させ、集団の全成員たちに飢餓を齎したということも予想できよう。

まさしく、原始人群共同体の一定の発展段階で、必須であったのは、狩猟準備期や狩猟本来の期間における成員間の衝突の完全排除であった。セミョーノフは、衝突のおもな原因は無規律な性関係であると捉えて、それをこの期間には禁止することが一番の死活の問題になったとしている。⁽⁴⁶⁾ つまり、狩猟期とその準備期間における性関係が集団に危機をもたらし、この危機をなくす方法は、この期間中の性交渉を回避させる信念をお互いが認識することであった。こうして共同体に狩猟-性タブーが出現したとされる。

しかしながら、共同体の成員の他に、タブーに従属せず、前=道徳一般の規範がおよばなかった人類が存在し、オルギー的攻撃を行う場合が見られた。そのオルギー的攻撃の様子をセミョーノフは以下のように説明している。つまり、各共同体が閉鎖した集団であったとはいえ、それらの交互の隔離は絶対的なものではなかったということであるから、「これらの共同体の成員が出会った時、性本能の抑制があ

まりにも強く、それ以上、抑制することが実際にはますます困難になった段階では、異なる集団の男女が出会うと、弱いものに対する強いもののオルギー攻撃の形をとるようになった。男たちが女たちを攻撃したが、逆の攻撃の場合もあった。男たちの攻撃と違い、女たちの攻撃が成功するのは、彼女らが明らかに大多数を占め、十分に組織されていた場合のみである。女たちのオルギー攻撃は儀礼的なものになったために、その客観的な必要性がなくなった後でも、ながい期間、伝統として残っていた」という状況が見られたということであった。⁽⁴⁷⁾

セミョーノフは更に具体的な例示として、B・マリノフスキーが記載したトロブリアンド諸島（メラネシア）で、ヤウサという風習について紹介している。「そこ（トロブリアンド諸島）では、いたるところで行われている一つの秩序があって、それによると、それぞれの家族の所有になる畑の除草は、全て村中の女たちが共同で集団的に行ってきた。キリウィナ島南部とヴァクタ島では集団除草に従事する女たちは、どんな男に対していても、その男が自分の村の住民でない限り、攻撃してもかまわない権利をもっていた」としている。⁽⁴⁸⁾

加えて、セミョーノフはマリノフスキーの解釈を用いて、ヤウサが、徹頭徹尾、異常に鮮明なオルギー的性格を帯びていたことに注目している。マリノフスキーの述べるとおり、ヤウサは、女たちによるオルギー的攻撃という以外には考えられないであろう。ヤウサはあらゆる特殊性が物語るところによると、それは本質的には、極めて野蛮な形をとり、かつての異例なほど狂暴で、性本能の現れの遺存であると考えられる。このように狂暴で野蛮な性本能の現れは、その本能があらかじめ長期にわたり満足されることなく、長期にわたり抑制されていた、と仮定して初めて解釈することができるとしている。⁽⁴⁹⁾

つまり、その抑制は共同の除草作業の時期だけ施されていたとされる。畑の除草期の最中は性交渉が極めて厳格に禁じられていただけでなく、除草作業の女たちに近づくことは、男たちには不作法として一般に考えられてもいた。ヤウサは、これら全ての資料から、その原初的形態では、性一生産タブーにより、長期間、抑制されてきた性本能の、自然発生的な、荒々しい解除にほかならないとされている。⁽⁵⁰⁾ この解除が可能になったのは、その対象がよそ者—その集団の成員にのみ課せられた性タブーがおよばない人たちであったからであり、ヤウサは特別な例ではなかったとされている。セミョーノフはその例として、「北部イランの一部の種族では、女たちが畑で共同労働のときには、よそ者の男たちは身の代金を払わなければ、そのそばを通り過ぎることはできなかった。さもなければ、よそ者の男たちは、トロブリアンド・ヤウサと特徴づけられたような処遇をうけることを覚悟しなければならなかった」という事例を述べている。⁽⁵¹⁾

しかし、そのようなオルギー的攻撃の状況を排除するために、別々の集団の成員間における性関係を、偶然的なものが規則化され、ついで必然的なものへの転化するという傾向を持つに至った。および集団間の関係を、尖鋭化させる要因から、互いに関係を取り結ぶ要因への転化を齎したのであった。セミョーノフはこのような状況を鑑みて、「以前には孤立していた各トーテム共同体は、ある程度、別のトーテム共同体との間に安定した関係で結ばれた。いたるところに相互に通婚しあう二つのトーテム共同体からなる体系双分・トーテム共同体組織が出現した」と分析している⁽⁵²⁾。すなわち、各双分群組織は、形成しつつある双分＝氏族組織として、それに属する氏族による共同体の形成へと至ったのである。

このような双分＝共同体組織の出現は、人類と社会の形成の終了を可能にしたのである。セミョーノフはこの双分＝共同体組織の出現を以下のように評価する。

各共同体は生物学的見地からすれば、一つの近親交配の系統であった。また、別々の共同体の成員間で性関係をとり結ぶことは、種内交雑の一つにほかならない。周知のように、交雑の結果の一つは、雑種強勢といわれ、子孫の体長、体力、生命力が著しく増大するが、種内交雑の場合も、子孫の多産性が両親の元来の形態よりも強くなる。交雑のもう一つの重要な結果は、遺伝的基礎が豊かになり、変異性の幅が著しく広がり、有機体進化の著しい柔軟性の増大であった。このために、異なる集団の成員間で性関係を結ぶことは、かなり以前から、既に機の熟して久しい旧人の生産発展の要求と、その身体構成との間の衝突を解決することを可能にした。そして、新たに力を獲得した共同体＝個体淘汰の作用で、この可能性は急速に現実性へと転化するようになった。双分＝共同体組織は、後期の特殊化したネアンデルタール人のホモ・サピエンスへの鑄直しの過程が、急速なテンポで進行していった特別な「溶鉱炉」であった。⁽⁵³⁾

つまり、抑制によって生み出された双分＝共同体組織が人類の進化にも、人類社会への共同体の強化にも、多く寄与したといえよう。そして、双分＝共同体組織は人類の形成の完了とともに人類社会の形成の完了へと導く道程の合流点であったといえる。また、双分＝共同体組織の前段階にて重要な意味を持つ外婚制を出現させることになったアガミーは、部分的、一時的なものから完全な、絶対的なものへ転化することができたのであった。セミョーノフはこの点に着目し、「外婚制の出現にともなって、集団の生活から性関係を完全駆逐する可能性が生じた点、すなわち、集団が完全にアガミー集団に、換言すれば氏族に転化する可能性が現れた。集団がアガミー集団に完全に転化するのにもなって、異なる集団の成員間の性関係が不可欠になった。双分＝原始人群共同体組織は、双分氏族組織に転化した」と指摘して、先に述べた合流点に向かう川床ともいべきアガミーの意義を確認しているのである。⁽⁵⁴⁾

上記の変遷を概観した上で、セミョーノフは原初形態から新人類に至る過程を改めて見直し、以下のように結論付けている。

人類社会は労働の発生によって生みだされた。生産活動の生成過程は、動物が人類へ、動物的結合体が純粋な社会有機体へ転化する過程の基礎であった。前人群の内部で生みだされた生産活動は、発展していくにつれ、この結合体内で支配的な動物的個体主義と必然的に矛盾するようになり、第一に、食欲のような生物的本能の抑制を要求した。その結果、生産諸関係の最初の形態、消費生産物（食物）と労働手段に対する完全な集団所有という関係、コムナル関係の成立過程が始まった。⁽⁵⁵⁾

後期前人の群れは、形成しつつある社会的有機体原始人（群）社会に転化した。この社会の発展は、生成した人類の集団主義と動物的個体主義の闘争の歴史であった。人類社会の形成は原始共同体の起源であった。⁽⁵⁶⁾

社会発生の一定の段階で、集団的、共同体的関係は、ほとんど確立された。摂食本能は抑制され、集団の監視のもとにおかれた。そして、ひきつづいて性本能の番になった。性本能が規制されえない行動は、原始人（群）共同体の緊張と衝突の源泉であった。確立した社会的、生産的な諸関係は、形成しつつある社会的有機体から生物的、性的な関係を放逐し始めた。乱婚は時間的に無制限のものから限定されたものになった。⁽⁵⁷⁾

この過程の論理的帰結は、集団の生活から性関係の完全な排除であり、それが行われた。性関係は集団内の関係から異なる集団の成員間同士の関係に変わった。そして双分系氏族組織が発生した。この組織の出現にともなって性関係は無規制ではなくなった。それは、完全に社会的な枠をはめられた。乱婚にかわって結婚が現れたが、結婚は個人同士の結婚ではなく集団婚であった。婚姻関係、すなわち性関係の社会的組織に見られる最初の形態は、集団婚、双分一氏族婚であった。この結婚は外婚の居住方式で、したがってそれによって結ばれる氏族は母系氏族であった。双分一氏族婚の出現にともなって、まだ積極的な規制外にあった唯一の生物学的本能、性本能が抑制され、社会的監視のもとにおかれた。こうして、全ての本能が社会的諸関係の監視のもとにおかれた。⁽⁵⁷⁾

社会的諸関係は、人類の生活のあらゆる分野で支配的なものとなった。これによって人類社会と社会的存在としての人類の形成過程が完了した。形成しつつある社会有機体からなる人類集団は、最終的に真の社会的有機体に転化した。既に完全に形成し終った最初の社会的有機体の完全に社会的な本質は、極めて明白に現れていた。この社会的有機体は、氏族、すなわちアガミー集団であった。そして、これは氏族から生物学的関係が完全に排除されたことを意味していた。氏族は、その成員が専ら社会的諸関係によってのみ結ばれていた集団であった。氏族は、完成した、形成し終った社会的有機体の最初の存在形態であった。原始人群共同体と異なり、氏族は真の形成し終った原始共同体であった。氏族と双分系組織の出現にともなって、形成しつつある人類と、形成しつつある社会にかわって、完成した人類と完成した人類社会が現れた。⁽⁵⁸⁾

結論の多くをセミョーノフの見解に委ねることになったが、人類社会の歴史は、最初に述べた途方もない長い期間も歴史区分からも分かるとおり、紆余曲折を繰り返した歴史であったということのみが言い表される性格に帯びている。つまり、原初状態の集住から、狩猟活動や生産活動を経て徐々に構成されていった人類共同体、そして人類の完成と共に姿を現したとされる人類社会、各々の特徴を一本の本流に整理することは困難であろう。しかしながら、セミョーノフの行った人類社会の歴史把握は、多くの資料や研究成果を用いたということもあり、極めて明確な人類史を提供してくれた。その側面として言えるのは、有史以降における共同体の崩壊の変遷を見ることができるが、有史以前の人類の発達・進化史においても共同体の孤立や共同体の崩壊、再度の共同体の強化といった状況が、それぞれの歴史区分においてなされていたということを提示してくれたことである。いわば波を描くような浮沈が、原始時代の共同体の状況にも存在していたということは、有史の以前と以降を問わずして普遍的であったという理解に結びつくのである。

第2章 歴史人類学による「家族」共同体の様相

第1節 ミヒャエル・ミッテラウアー『歴史人類学の家族研究』をめぐって

家族と氏族

M・ミッテラウアー『歴史人類学と家族研究』に所収された第一論文「ヨーロッパの家族形態」は⁽¹⁾、イギリスの社会史家ピーター・ラスレットがその概括的な論文「西洋家族の時代を通じての諸特徴」において示した以下の四つのメルクマールを提示することから開始される。

第一に、「西洋」では両親と子どものみが構成する核家族が優勢であり、これは「複合家族世帯」および「拡大家族世帯」から区別して「単純家族世帯」と特徴づけられる。

第二に、「西洋」では平均して相対的に晩婚であり、とくに女性がそうであるが、男性にもあてはまる。その結果世代間の年齢差が大きい。

第三に、「西洋」では夫婦間の年齢差が比較的小さく、それは夫婦のパートナー関係への傾向を促した。さらには妻が夫より年長である夫婦の割合もかなり高い。

第四に、家族には夫婦と血縁関係にない奉公人も含まれた。奉公人は常に若い人々からなり、かれらにとって「他人の家での奉公」はかれらのライフサイクルにおけるひとつの通過段階を示すものに過ぎなかった。ラスレットはこの点に関連して「ライフサイクル・サーヴァント」との表現をも用いる。⁽²⁾

そして、ミッテラウアーは、現代的なヨーロッパ家族像を提示した上記のメルクマールを示した上で、次のような家族の成員の結婚の状況について述べている。「ラスレットによってまとめられた西洋家族の諸特徴は相互に関連するものである。たとえば多世代家族の割合の低さは、結婚年齢が平均的に高いことの主要な原因のひとつである。このことはまた、奉公人としての独身段階が相対的に長いことと関連している。農村部の女性奉公人や都市の奉公人は実際、たいていは未婚であった」。⁽³⁾ 更に、社会史の文献においてみられる「ヨーロッパ的結婚パターン」があるが、これはその使用頻度において「西洋家族」に匹敵するものであるとしている。⁽⁴⁾

加えて、ミッテラウアーは「歴史人口学は次のような点を明らかにしてきた。すなわち、かなり古い時代から、およそレニングラードとトリエステを結ぶ線の西側では、男性の、またとくに女性の結婚年齢はかなり高いのが特徴で、二十代の終わらないしは半ばである。この境界地域の東側では男女ともかなり早婚であり、平均的な結婚年齢はここではむしろ、非ヨーロッパ的な諸事情に対応している」と分析している。⁽⁵⁾ いわゆる「ヨーロッパ的結婚パターン」の高い結婚年齢について言及し、異文化間の比較においては例外的現象であるが、それはヨーロッパの社会発展の特性であり、近代のうちに西欧・中欧において育まれた文化のもつ特性であると解釈しており、この意味でこの結婚パターンに対応する家族形態を、「西洋的」と呼ぶのは正当であると明言している。⁽⁶⁾

ここに示される「ヨーロッパ的結婚パターン」は、既にフランク時代に一般的であったと指摘した上で、独自の見解を述べている。

ヨーロッパ大陸の東部におけるこの結婚パターンの広がりはおおよそ、中世の東方植民によって「西欧の」農業・都市制度が導入された地域に一致する。また「ヨーロッパ的結婚パターン」に対応する家族制度の要素は、たしかに中世初期にまで遡って見出すことができる。カロリング時代の所領明細帳や寄進証書には、農民の家族においては核家族が優勢であったことを示している。祖父母の片方、あるいは双方との共住は当時、極めてまれにしか見られなかった。農村住民以上に、中世都市においては二世帯家族が標準的な家族形態であった。ここでは既に当時からネオロカリティの原則—つまり結婚に際して自立的な世帯を形成すること—が普及していた。また奉公も西欧・中欧・北欧においては既に中世にかなり広がっていた。現在までの研究成果によれば奉公は、一定の年齢期における通過段階であるという明確な形態によって、ヨーロッパ的社会発展の特徴的現象とみなされているのである。

(7)

対して、インドや東アジアの文化圏に着目し、複合的な大家族形態は、「ヨーロッパ的結婚パターン」の普及地域には比較的まれであるとしている。このことは、ジョイント・ファミリーのタイプ、つまり両親が結婚した息子たちとともに住む、あるいは幾人かの既婚の兄弟ないし男系親族が共住する形態についても、また、日本における「イエ」、両親と一人の既婚の息子および孫たちからなる「直系家族」についてもヨーロッパについてはまれであるとされている。中欧・西欧においてこのような家族形態が現われるところでは、それらは常に南フランスの多くの地域や、イタリアの小作人たち、あるいはオーストリアの軍事的境界地域の状況といった経済、相続法、軍事における独特の事情によって説明することができる程度である。(8)

すなわち、中欧・西欧においてより顕著な広がりをもつ複合的多世代家族の唯一の形態、すなわち農民の隠居家族は、ヨーロッパ外では類似の形態を見出さないということである。ミッテラウアーは、この隠居家族について分析し、「隠居家族は人的構成においては直系家族と異なるところはないが、しかし権威の構造において大きな相違がある。つまり隠居家族では、家長は年老いた父ではなく、屋敷を父から継承した息子である。家族における権威が老年で放棄されるこの例は、異文化間の比較のなかでも比類なき現象である。通例は最年長者による家族運営の指導や年長者原則こそが、複合的大家族形態の特徴をなすからである」と理解している。(9)

つまり、ヨーロッパ以外の多くの文化圏で優勢な複合家族形態が、ヨーロッパの歴史のなかで主要な家族タイプとして現われるのは、ロシアと東欧のいくつかの地域やバルカン地域においてのみである。(10) たとえば南スラヴの「ザドルガ」がそれであるが、これはスラヴ諸民族のエスニックな特殊性などではなく、類似の構造はアルバニア人、ルーマニア人あるいはマジャール人にも見られるとされる。(11) これらの東欧・南東欧における複合家族の形態は全て、強く父系的に構成されているとして、ミッテラウアーは次のような制約を提示している。いわゆる、「東欧・南東欧における複合家族の形態は—つまり男系出自において相互に親族関係にある男性、したがって父・息子・兄弟・オジ・兄弟の子どもである甥・男系の従兄弟が共住するのであって、義理の兄弟、義父、娘婿、その他の女系親族はまったく含まれない。女系親族を家族団体内に受け容れるためには、特別の養子ないしは、疑似親族関係をつくりだす、その他の方法を必要とした。こうした社会の親族システムは徹頭徹尾父系的に規定されていたのである」と指摘している。(12) これに対し「ヨーロッパ的結婚パターン」の広がった地域では家族構成においても、女系もより大きな意味をもつ、原則として双方向的な親族システムが機能していると説明している。(13)

また興味深い事例として、「父系で相互に親族関係にある男性たちの結合は、南東欧の多くの地域では狭い世帯共同体の範囲を越え、氏族制度と云うる集団にまで広がっている。たとえばアルバニアとモンテネグロでは19・20世紀に至るまで、こうした社会構造が存在した。ここでは同じ祖先からの出自意識が、所有権・結婚基準・血の復讐の義務を規定している」⁽¹⁴⁾とミッテラウアーは述べている。加えて、古い時代には氏族制度の要素は、「氏族」という言葉の発祥地であるスコットランドやヨーロッパの他の地域でも存在したが、これらの地域はいずれも、旧制度の残余する社会構造を持つ後進地域である。つまり、ヨーロッパのより発展した地域では、中世にまで遡っても氏族制度のいかなる要素も存在しないということである。

しかしながら、貴族の場合は例外をなしており、貴族における血統意識は、都市・農村大衆におけるよりもはるかに大きな役割を果たしたと考えられ、複合的大家族形態や父系的な親族システムないしは氏族制度は、ヨーロッパ以外の文化圏ではしばしば、祖先祭祀が大きな意義をもつ宗教システムと結びついているとされている。⁽¹⁵⁾つまり、ヨーロッパの家族制度の発展にとっては、この広い地域を支配する宗教が祖先祭祀を知らなかったという点が、重要な意味をもっていたということである。この点について、ミッテラウアーは、以下のようにキリスト教が大半を占める社会状況の中で見られた例外的な事例について説明する。

ヨーロッパで初期段階において祖先祭祀が存在したところでも、それは全てキリスト教化によって抑圧された。このことはたとえば中世盛期のスカンジナビアではっきりと見ることができる。まれな例外としては、古い祖先祭祀がキリスト教的に粉飾された遺物として、生き残っている場合がある。とくに注目すべきはいわゆる「スラヴァ祭」の習慣であり、これはザドルガの大家族形態が広がっている、南スラヴ地方のいくつかの地域で行われているものである。ここでは各家族はひとりの聖人をその特別の守護者として祭るのだが、この聖人は明らかに、かつて崇敬されていた祖先の替わりにおさまったものである。⁽¹⁶⁾

祖先との結びつきは、その記憶のために捧げられたいわゆる「スラヴァのローソク」をともすこと、そして「チトゥーラ」、すなわち男系の物故した祖先の名簿を読み上げることに現われている。その他にも父系的な祖先意識と関連する多くの事例がある。たとえば、家聖人の祭祀は男系のうちに継承されること、養子である息子はその養父の家聖人を継承すること、同じ家聖人を崇める者は互いに親族であると意識すること、その影響は極めて強く、族外婚の規則によって、かれらの間の結婚は許されないこと、氏族制度を伴う地域では、ひとつの氏族全体が共通の家の守護聖人を持つこと、などである。⁽¹⁷⁾

こうした祖先崇拜の家族制度への影響について、次の数点を見出すことができる。つまり、ヨーロッパにおける家族の発展に見られる多くの特徴は、こうした祭祀の形態がヨーロッパでは、かりに存在していたとしても既に早期にキリスト教によって抑圧されたことによって現われてきたのである。生殖行為は、祖先供養は一般に早婚をもたらすことから、死後の運命が男系子孫による死者供養に依存しているとすれば、できるだけ早く子孫づくりを始めるのが得策であった。したがって結婚はこのような条件下では、性的成熟後まもなく行われるが、子どもの死亡率が高いため、少なくともひとりの息子が生き

延びるよう、可能なかぎり多くの子どもをもうけることが重視される。それゆえ女性の妊娠可能な年齢期間は過度に利用されねばならないことになる。⁽¹⁸⁾しかし、「ヨーロッパ的結婚パターン」の浸透した地域での平均的に高い結婚年齢は、このような宗教的背景において多く存在しないことは理解できる。

また、旧ヨーロッパ社会で一般にみられた居住習慣に関して、ミッテラウアーは、「祖先祭祀のもたらすような居住の規範的形態とは相容れない。というのは、後者では若夫婦の父方への同居を伴い、それは多世代家族の成立を助長するからである」と述べている。⁽¹⁹⁾対して、「ヨーロッパ的結婚パターン」の地域では、新居で新所帯をなすのが通例であったとされ、父方の家への居住がなされた場合でも、たいていは若夫婦の結婚の前に、その家がかれらに委譲する必要があったとされている。⁽²⁰⁾

他方、「祖先崇拜を行う社会においては、家長は生涯にわたってその地位を維持する。まさしく祖先への近さが権威を強化するのである。ヨーロッパの農民・手工業者の家族においては、寡婦が再婚の際に、従来住んでいた家をそのまま与えられるのが、かなり一般的であった。この妻方同居は父系的な祖先祭祀を行う社会では考えられないものであろう。なぜなら、それによって男系家系が中断されるからである」というミッテラウアーは指摘し、「旧ヨーロッパ社会の家族制度の特徴的形態をなす奉公も、息子たちが祖先供養のために、父の家に拘束されることのないところでのみ、可能である」としている。⁽²¹⁾

この点でミッテラウアーが着目しているのは、養子とレヴィラート婚と呼ばれるユダヤにおける寡婦とその亡夫の兄弟との婚姻である。すなわち、「ヨーロッパでは儀礼を経て形成されるこのような擬制的な親族関係は、一方では大家族形態を特色とする東欧・南東欧の諸地域において、本源的なかたちで、また他方では強い血統観念を特徴とする貴族上層において存在した。これに対して中欧・西欧の都市・農村住民の間では、まったく形式張らない里子の受け入れがみられた。これは家族の連続ではなく、扶養のみにかかわる、一種の養子である。レヴィラート婚は、息子なく死んだ兄弟の寡婦との結婚によって子孫をもうけるという、祭祀的意味を持つ義務であるが、ヨーロッパではほとんどまったくみられない。その萌芽は血統観念の強いカルパチア・バルカン地方の後進地域でまれに散見されるにすぎない」⁽²²⁾という状況が、家族制度の特徴として部分的に見られたことは、何らかの要因が関係しているように考えられるが、取り分けての要因を見出すことは難しい。

旧ヨーロッパ社会では、家族関係の宗教的秩序による拘束は、比較的弱いものであるとされている。そのような中で、経済的諸条件による家族構造の多様化は顕著に見られ、家族が生産の単位であるという社会的環境においては特にその傾向があった。つまり、家族経済において、労働組織の必要が、家族の構成とその構成員の関係を大きく規定していた。ミッテラウアーは家族構造の多様化に着目し、「農民の家族はこの点で手工業者や商人の家族とは原則的に異なっていた。また農民の家共同体のなかでも、牧畜・穀作・ブドウ栽培のいずれが中心であるかによって、相違が生まれた。この労働組織の必要性によって強く影響されるという、ヨーロッパの家族制度の典型的な特徴は、奉公の習慣に明らかに現われている。家族はその労働力需要に応じて、親族関係にない補助労働力を受け入れることによって補充され、この労働力は一定期間家族団体に属することになる。その際様々な労働環境が、異なる、そして内部で階層化された奉公の形態の多様性をもたらした」と説明している。⁽²³⁾例えば、農民の屋敷では奉公人の階層は「家畜番」から「管理人」まで、「子守り女」から「大下女」まで広がり、手工業においては例外なく徒弟・職人の段階が存在した。これらの奉公の諸形態は全て、旧ヨーロッパ社会では原則的に家族の中に組み込まれており、その奉公の関係、フランク帝国のグルントヘルシャフト〔荘園〕制度にまで遡るとされる。農村地域における奉公の起源は、グルントヘル〔荘園領主〕によって組織された、マ

イエールホーフ〔直営農場〕と農民屋敷の間の労働力交換にある。⁽²⁴⁾

経済的諸条件による家族構造の多様化の根底には主人と奉公人を結びつける権威的な風潮が存在している。それは宗教的秩序とは異なる、日常生活の大半を支配する規範的な要素を持ち合わせていたといえる。この強き繋がりについて、ミッテラウアーは以下のように説明する。

旧ヨーロッパ社会では、家族団体における若者の生活形態にとって、奉公の慣行は極めて重要な意義を持っていたのである。しかし農民社会では家族における老人の地位もまた、グルントヘルシャフトによって強い影響を受けたように思われる。農民の隠居制度はおそらく、グルントヘルがその領民から徴収すべき賦課を考慮して、もはや肉体的にフルに作業できない農民に、その息子が替わることを命じたことに起源を持つものであろう。この慣習は、伝統的な社会においては、たいてい文化的に強く維持されてきた年長者の権威との、衝撃的な絶縁を意味する。またヨーロッパ封建制におけるグルントヘルはさらに、結婚規制を通じて家族構造にも干渉した。⁽²⁵⁾

家族構成に影響を及ぼした経済的条件は、ヨーロッパに特徴的な結婚年齢にも影響しているとされている。「所帯形成の際に、家族経営の相続による継承を基盤としえなかった人々は結婚に際して新居を得るために、多くの金を蓄えておかねばならなかった。必要な資金はたいてい男女とも奉公の間に稼いだ。奉公と新居定住は、このかぎりでは因果関係にある。都市・農村の下層民ではまさしくそのゆえに、かなりの晩婚となるのである」⁽²⁶⁾ という指摘のとおり、経済的条件が結婚に関しての重要な規範となり、逆に考えるなら、早婚の抑制を齎していたといえよう。

旧ヨーロッパにおける結婚関係の傾向

婚礼の状況について異文化間を比較すれば、旧ヨーロッパ社会での結婚する際の男女の平均年齢が相対的に高いことから、ここでは結婚相手を捜し求める段階がかなり長くなっていた。旧ヨーロッパ社会では性的成熟と結婚の間に長い期間が存在したため、この社会では婚外出生という案件が生じていた。ヨーロッパにおいて成立した性に関する規範の厳格さは、このような案件に対しての働きかけであったと考えられる。ただし、奉公人の多い農民屋敷の広がる地方では、婚外子は比較的容易に育てられたとされている。ここでは人々は安価な労働力に関心を持った。そのために婚外子の出産は厳しい制裁を受けなかった。これに対して都市部の手工業を行う地域においては、婚外子の出産は極めて強く排斥されたとされる。⁽²⁷⁾ ミッテラウアーは婚外出生の状況と制裁について以下のように述べている。

婚外出産の制裁の差異は当然ながら、ヨーロッパ史においてこのような経済的な前提条件によってのみ生じたのではない。社会的な条件とは関係なく、娘の処女性はとくに地中海地方では、家族の名誉の中心をなすものとして現われる。婚前の性的交渉に対する特別に厳しい制裁は、バルカン半島のいくつかの地域、つまり他ならぬ父系的な氏族制度が強固に形成された地域で見られる。ここでは血統観念と家族システムの男権的な秩序が関連しているように思われる。しかし婚外出生に対する地域ごとの規範の相違にもかかわらず、キリスト教会の中心的な教説はヨーロッパのどこでも、原則的に結婚に至るまでの禁欲を説いていたといえる。しかしこの戒めは、高い結婚年齢のゆえに旧ヨーロッパ社会では、同じく処女性の原則が宗教と結合していたヨーロッパ以外の多くの文化圏におけるより

も、はるかに遵守困難なものであった。⁽²⁸⁾

ここからも分かるように、処女性の神話とも言うべき傾向が結婚と結婚により新しく生まれる家族の構成において大きな規範を提供していたようである。しかしながら、奉公という責務の中での他者との共住は、その規範に従うことを難しくさせていた面もあると理解できる。加えて、一夫一妻制の原則もまたヨーロッパの全ての教会において定められ、この文化地域ではしたがって、一夫多妻〔一妻多夫〕の家族形態が原則的に存在しないという状況も上記のような傾向に由来するものであろう。しかし、一夫一妻制原則が現実において破られることは、メロヴィング諸王のような君侯の家においてまれにはあったということも付言する必要がある。

更に留意すべきことは、一夫多妻と「順次の一夫多妻」との区別である。それはつまり配偶者の死亡や離婚の後の再婚である。これに対してキリスト教ヨーロッパでは、寡婦の再婚に関して、古い時代のいくらかの反対を除けば、宗教的な疑念は生じなかったとされている。⁽²⁹⁾ こうした「順次の一夫多妻・一妻多夫」の形態はヨーロッパの多くの地域で極めて一般的であった。したがって異母あるいは異父の兄弟姉妹の共住は、旧ヨーロッパ社会ではけっして稀ではなかったとされる。「配偶者双方が何度も相互に相手を失うことによって、子息が両親のいずれとも血縁関係にないという家族構成も生じた」のである。⁽³⁰⁾

しかし東欧・南東欧の複合的家族形態の事情は困難性を含んでいた。すなわち、「夫の死後に寡婦が再婚しようと望むなら、彼女は通例、亡夫との間の子どもを亡夫の家に残さねばならなかった。それは父系的な大家族の特殊な問題であり、多くの地域ではレヴィラート婚によって、この問題を解決しようとしたのである」⁽³¹⁾ という傾向が存在していたのである。

続いては、結婚によってなされる人間関係や家族を支える家の存在に着目したい。ミッテラウアーは「家族共同体の空間的な土台としての家は、ヨーロッパの家族の社会史において極めて重要な役割を果たしている。このことは家族用語の発展において、建築物から、そこに住む人的グループへの用語の転用がしばしばみられるという事実を示されている」というように家の意義を重視している。そして、「ヨーロッパ的伝統の家族理解においては、非親族の構成員集団もまた家共同体に編入されていたという点が、長い時期にわたって重要であった」と解釈している。⁽³²⁾

興味深いことに、強く家に向けられていた集団意識は、家族名の成立の中にもはっきりと現われているとされ、中欧・西欧では多くの家族名は屋敷名に由来しており、とくに孤立農圃制の地域においてそのような傾向が見られる。つまり、自他による家族の理解において、ある場所との結びつきが重視されているということである。ミッテラウアーは家族名が屋敷名に由来する事例について「それは、屋敷を取り替えると家族名も変わるほどである。この風習は日常の会話の中では、家族名が固定した時代にもなお維持された。奉公人でさえしばしば、かれらの出身家族ではなく、かれらがその都度奉公している屋敷の名を記された」と示している。⁽³³⁾

居住の場所と関連を持つ家族理解に対して、家族の系譜的な由来に依拠する家族意識が存在しているということもここに言及することができる。特に、その傾向が顕著に表れているのが南スラヴ地方であり、その地域での家族名のほとんどは祖先の名を父系が継承することで、世代を超えている。

このような家族と住居の関連性は存在するものの、家族構造と居住の空間的要素の関連性は、雑多であり、その傾向を示すことはできない。ミッテラウアーはその雑多な関連性を勘案しつつ、事例の提示

を含めた上で次のように説明している。「たとえば農民の隠居制家族には、常にひとつの屋敷の傍らに隠居人の小家屋が立つかたちが対応しているとは、けっしていえない。また自身のかまどを持つ隠居人の小部屋の存在すら、自明のものではなかった。隠居人はしばしば農民家族と同じ空間内に居住したのである。『ジョイント・ファミリー』タイプの複合的な家族構造もまた、これに対応した居住空間の配置を持つのが通例であるとは、断じていえない。全ての夫婦の寝室が同じ一部屋であるケースから、各夫婦が別々の部屋あるいは小屋を持つケース、さらには住居が完全に分離していて、仕事場のみが共通であるケースにいたるまで、様々なかたちの居住空間構成がみとめられるのである。」⁽³⁴⁾

例えば、そこに見る夫婦間における同一の寝室という状況からして、ヨーロッパにおける宗教的規範であるキリスト教は家族内部の男女の地位についてはあまり大きな意義を持たなかったといえる。ヨーロッパの社会発展において、宗教は両性の各々の役割に影響を与えたものの、キリスト教の場合は男女の区別を前提とした規範や理念を提供していないといえる。つまり、アラビア圏や東アジアに見られる男性優位の社会的区別を、キリスト教は示唆していないのである。ミッテラウアーは男女の役割に関するキリスト教とユダヤ教の立場を比較して、以下のように説明している。

ヨーロッパにおけるユダヤ教と比べても、キリスト教にあっては両性の役割や男女の家族内部での地位の宗教的前提条件といったものは、相対的に低い意義しか持っていなかった。ユダヤ教では、男性に限定された聖典の学習義務は、少年と少女の教育の区別から、家族内部の分業、そして外見上の理想にいたるまで、男女の役割の区別に強い影響を与えた。ユダヤ教においては、家での祭祀がはるかに重要であり、それによって家父の家父長としての地位が確固としたものとなった。明らかに集団的宗教であるキリスト教には、そのような傾向はない。家族内部の秩序に影響を及ぼそうとする試みは、教会の側ではその長い歴史を通じて、まったくなかったとさえいえるであろう。この点については、中世の身分別説教を挙げることができる。⁽³⁵⁾

まさしく、キリスト教とユダヤ教の男女の役割に関する明白な差異がここに示されている。一見、祭祀を掌る上で男女の役割分担を要求するキリスト教の男女区分を想起することもあるが、それは部分的であったといえよう。すなわち、男女の役割が同一であるという意味では、キリスト教から見出す利点も多い。しかしながら、男女の役割が明確に区分されているからこそ、各々の責任を全うするために意欲的な生活を送るための動機付けが生じることも確かである。平等という意味において、男女の役割に対する両宗教の立場を的確に比較することはできない。

近代初期の「家父の書」は家族的影響を強く受けているが、宗教的な意味を持つ書物として位置付けられない。つまり、ヨーロッパ的伝統において、宗教的制度や規範による男女の家族内部における役割の拘束が比較的自由であったことから、男女の役割分担は社会層や労働条件に伴い多様化されたのである。同一の都市でありながら、貴族上層では女性の強い従属が求められるが、手工業者のもとでは男女の平等関係が一般的に通用するという、階層的な差異が見られる場合もあったとされる。⁽³⁶⁾

しかしながら、家族内の家族における女性の地位に関して、「寡婦となった女性が家族の長となる可能性が、社会にどの程度存在するか」ということを重視する場合、「伝統的なヨーロッパのたいていの地方で一女性は寡婦としてあきらかに家族の長たりえた。ときにはこうした女性は、折々の政治的・公的な場で、自身が長である家共同体を代表することさえ認められていた」⁽³⁷⁾ という史的に鑑みたミッテラウ

アーの考察は興味深い。

男女関係の形式として一般的な「結婚」はその成立条件において、原則的に男児の出生が女児のそれより重視されることがなかった。キリスト教においては、一定の階層や地域において息子が優先された事例を除き、息子は特別な祭祀機能を担わないとされた。つまり、「キリスト教は、息子たちのうちのひとりを、宗教的理由から優遇するということもなかった」のである。⁽³⁸⁾

対して、君侯の家における長子相続制が見られたことは確かである。この点について、ミッテラウアーは「君侯の家における長子相続制は国家の一体性を維持するために行われた。レーエン法〔封主・封臣関係を規定する法〕では軍事制度の経済的基盤を維持するために、長子相続制を導入することができた」として、農民の場合についても「農民の相続規定においても、多くの地域において単独相続権が形成された。この点について決定的な意義をもったのは、農民保有地の細分化を妨げ、支配者に対する農地の負担能力を維持しようとする領主の関心であった。長子の相続権とならんで、農民の間には末の息子を優遇する相続規定もしばしばみられる（ミノラートあるいはウルティモゲニトゥル）」と分析している。⁽³⁹⁾

第三の形態として、「最も有能な者が相続権を得るという方法」があり、多くのツンフト規約における、親方権が娘を通じて義理の息子に継承される場合が挙げられる。いずれにしろ、ひとりの子どもを優遇するあらゆる事例において、経済的合理性、あるいは扶養への配慮がその主たる原因となっているということであり、ミッテラウアーは、これらの優遇する事例を支えているものが「文化全体を規定する宗教的規範ではない」⁽⁴⁰⁾ ということを強調している。

すなわち、まずは結婚自体に関する着目よりも、家族や生活領域を支配するこれらの規律の方が重視されるという原像が、そこには含まれているといえよう。

脚注・出典

第1章 共同体の起源への着眼—ユーリー・セミョーノフの研究と古人類学

序 論 共同体の起源に関する研究をめぐって

- (1) ユ・イ・セミョーノフ『人間社会の起源』（新堀友行・金光不二夫訳）築地書館、1991年、iii—iv頁
- (2) 同上、iii頁
- (3) 同上、iv頁

第1節 人類史における共同体の始原

- (1) ユ・イ・セミョーノフ『人間社会の起源』（新堀友行・金光不二夫訳）築地書館、1991年、付一人類紀編年表（訳者作成）参照。
- (2) 同上。
- (3) 同上。
- (4) 上掲、セミョーノフ『人間社会の起源』、194頁
- (5) 同上。
- (6) 同、195頁
- (7) 同上。
- (8) セミョーノフ『人間社会の起源』196頁
- (9) 同上。
- (10) セミョーノフ『人間社会の起源』197-8頁（Lumley: A Paleolithic camp at Nice. SA N5 参照）
- (11) 同、198頁
- (12) 同、199頁
- (13) 同上。
- (14) 同、199頁、（Lee: What hunters do for a living, or How to make out on scarce resources. MH. 参照）
- (15) 同上。
- (16) セミョーノフ『人間社会の起源』、202頁
- (17) 同上。
- (18) 同上。
- (19) 同、202-203頁。（Freeman L.G.: Acheulean sites and stratigraphy in Iberia and the Magred. ATA. 参照）
- (20) 同、203頁（Freeman 参照）
- (21) 同上。
- (22) 同、204頁。
- (23) 同上。
- (24) 同、204頁。
- (25) 同、204-205頁。
- (26) 同、205頁。
- (27) 同上。
- (28) 同、206頁。
- (29) 同、207頁。
- (30) 同上。
- (31) 同上。
- (32) 同、208頁。
- (33) 同上。
- (34) 同上。
- (35) 同上。
- (36) 同、208頁。
- (37) 同上。
- (38) 同、208-209頁。
- (39) 同、209頁。

- (40) 同上。
- (41) 同、210 頁
- (42) 同、211 頁。
- (43) 同上。
- (44) 同、212 頁
- (45) 同上。
- (46) 同、213 頁。
- (47) 同、218 頁
- (48) 同上。
- (49) 同上。
- (50) 同上。
- (51) 同上
- (52) 同、218-219 頁
- (53) 同上、219 頁
- (54) 同上。
- (55) 同上。
- (56) 同、219-220 頁
- (57) 同、220 頁
- (58) 同上。

第 2 節 人類社会発生の原像

- (1) ユ・イ・セミヨーノフ『人間社会の起源』（新堀友行・金光不二夫訳）築地書館、1991 年、224 頁。
- (2) 同上。
- (3) 同上。
- (4) 同、224-225 頁。
- (5) 同、225 頁。
- (6) 同上。
- (7) 同上。
- (8) 同、226 頁
- (9) 同上。
- (10) 同上。
- (11) 同、227-228 頁。
- (12) 同、228 頁
- (13) 同、230 頁。
- (14) 同、231 頁。
- (15) 同上。
- (16) 同、232 頁。
- (17) 同上。
- (18) 同上。
- (19) 同上。
- (20) 同、256 頁。
- (21) 同上。
- (22) 同上。
- (23) 同、256-257 頁。
- (24) 同上・
- (25) 同、258 頁。
- (26) 同上。
- (27) 同、261 頁
- (28) 同、262 頁
- (29) 同、264 頁
- (30) 同、265 頁
- (31) 同、277 頁

- (32) 同、278-279 頁
- (33) 同、280 頁。
- (34) 同上。
- (35) 同、281 頁。
- (36) 同、282 頁
- (37) 同上。
- (38) 同上。
- (39) 同、283 頁。
- (40) 同、286 頁。
- (41) 同上。
- (42) 同、287 頁
- (43) 同、288 頁。
- (44) 同、289 頁。
- (45) 同、295 頁。
- (46) 同、296 頁。
- (47) 同、297 頁
- (48) 同、297-298 頁。
- (49) 同、306 頁。
- (50) 同上。
- (51) 同、308 頁。
- (52) 同、314 頁。
- (53) 同上。
- (54) 同、316 頁。
- (55) 同、319 頁。
- (56) 同、325 頁。
- (57) 同、326-327 頁
- (58) 同、328 頁。

第2章 歴史人類学による「家族」共同体の様相

第1節 ミヒャエル・ミッテラウアー『歴史人類学の家族研究』をめぐって

- (1) M・ミッテラウアー『歴史人類学の家族研究—ヨーロッパ比較家族史の課題と方法』（若尾・服部他訳）、新曜社、1994年、19-35頁。
- (2) 同、20-21頁。
- (3) 同、21頁。
- (4) 同上。
- (5) 同上。
- (6) 同上。
- (7) 同、22頁
- (8) 同上。
- (9) 同上。
- (10) 同上。
- (11) 同上。
- (12) 同、23頁。
- (13) 同上。
- (14) 同上。
- (15) 同上。
- (16) 同、23-24頁。
- (17) 同、24頁。
- (18) 同上。
- (19) 同上。

- (20) 同上。
- (21) 同、25 頁。
- (22) 同上。
- (23) 同、25-26 頁。
- (24) 同、26 頁。
- (25) 同、27 頁。
- (26) 同上。
- (27) 同上。
- (28) 同、28 頁
- (29) 同上。
- (30) 同上。
- (31) 同上。
- (32) 同、29 頁
- (33) 同上。
- (34) 同、30 頁。
- (35) 同、31-32 頁。
- (36) 同上、32 頁。
- (37) 同、33 頁
- (38) 同、34 頁
- (39) 同上。
- (40) 同、35-34 頁。

著者

山下祐樹（熊谷地区労働組合協議会・地域社会研究会）

地域社会研究論集 3

共同体の起源に関する研究と歴史人類学の家族研究をめぐる考察

ユーリー・セミョーノフ『人間社会の起源』と

ミヒャエル・ミッテラウアー『歴史人類学の家族研究』の読解

2016年12月23日発行

発行：熊谷地区労働組合協議会・地域社会研究会

事務局：熊谷地区労働組合協議会（熊谷地域労働者福祉協議会）

（埼玉県熊谷市石原 1410-1）